

平成4年度(第28次)高校教師海外研修  
報告書

平成4年12月

国際協力事業団

広 報

J R

92-7

平成4年度(第28次)高校教師海外研修報告書

平成4年12月

118  
36  
64P



JICA LIBRARY



1116585191



平成4年度(第28次)高校教師海外研修  
報告書

平成4年12月

国際協力事業団

国際協力事業団

26921

## 序 文

国際協力事業団(JICA)は、国際協力に関する啓発事業の一環として、次代を担う高校生の開発教育(国際理解教育)を実践・研究されている全国高等学校国際教育研究協議会加盟校の先生方を対象として、昭和40年から、海外への派遣研修を行ってまいりました。

本年度は、南米に3名、フィリピンに12名、マレーシア・シンガポールに11名の合計26名の先生方に参加していただき、訪問国の経済・社会・教育事情等や、我が国の国際協力の現場を視察していただき、理解を深めていただきました。

ここに、参加者の研修報告をとりまとめましたので、関係各位のご高覧に供します。

平成4年12月

国際協力事業団

総務部長 高野 幸二郎





# 目 次

1. 参加者氏名 .....	7
2. 報 告	
(1) フィリピン班日程 .....	11
沖縄県立北部農林高等学校      下 地 弘 徳 .....	12
東京都立志村高等学校          高 田 幸 一 .....	17
大阪府立西淀川高等学校        佐 川      昭 .....	25
宮城県立泉高等学校            松 田 昭 二 .....	29
岩手県立盛岡商業高等学校      野 場 勇 吉 .....	35
佐賀県立伊万里農林高等学校    青 木 久 生 .....	39
山口県立防府商業高等学校      田 村 和 之 .....	44
北海道立深川農業高等学校      多 田 哲 司 .....	49
岐阜県立高山工業高等学校      田 邊 壽 也 .....	52
愛知県立時習館高等学校        藤 城 俊 郎 .....	58
長野県立須坂園芸高等学校      永 田 栄 一 .....	63
大分県立佐伯鶴城高等学校      丸 尾 直 彦 .....	67
(2) マレーシア・シンガポール班日程 .....	70
愛媛県立中山高等学校          木 下 賢 三 .....	71
島根県立江津工業高等学校      野 津 明 美 .....	74
山形県立寒河江高等学校        寒河江 松 夫 .....	77
青森県立三戸高等学校          石 田 一 成 .....	80
石川県立七尾農業高等学校      田 畑 正 村 .....	82
三重県立飯野高等学校          服 部 好 美 .....	85
福井県立敦賀高等学校          山 本 泰 彦 .....	88
埼玉県立所沢商業高等学校      武 田 俊 太 郎 .....	91

私立横浜商科大学高等学校	山田宏治	95
静岡県立吉原高等学校	渡辺紀之	98
奈良県立耳成高等学校	西田嗣夫	102
(3) 南米班(ブラジル・パラグアイ)日程		105
徳島県立穴喰商業高等学校	本田富夫	106
高知県立須崎工業高等学校	川西輝道	109
茨城県立猿島高等学校	山口一男	116

# 1. 参加者氏名

〔フィリピン班〕

	氏名	生年月日	所 属 学 校 所 住	担当教科
1	下地弘徳	20. 8. 25	沖縄県立北部農林高等学校 沖縄県名護市字茂佐13	農 業
2	高田幸一	26. 7. 4	東京都立志村高等学校 東京都板橋区西台1-41-10	保健体育
3	佐川 昭	33.10.24	大阪府立西淀川高等学校 大阪府大阪市西淀川区出来島3-3-6	英 語
4	松田昭二	22. 7. 31	宮城県立泉高等学校 宮城県仙台市泉区将監10-39-1	英 語
5	野場勇吉	20. 4. 24	岩手県立盛岡商業高等学校 岩手県盛岡市本宮大屋敷5	英 語
6	青木久生	35.10. 8	佐賀県立伊万里農林高等学校 佐賀県伊万里市二里町大里乙1414	農 業
7	田村和之	37. 4. 24	山口県立防府商業高等学校 山口県防府市中央町3-1	数 学
8	多田哲司	34. 1. 20	北海道立深川農業高等学校 北海道深川市一巳町字一巳633-1	農 業
9	田邊壽也	17. 4. 17	岐阜県立高山工業高等学校 岐阜県高山市千鳥町291	工 業 (機械)
10	藤城俊郎	19. 4. 24	愛知県立時習館高等学校 愛知県豊橋市富本町	理 科 (生物)
11	永田栄一	28. 8. 4	長野県立須坂園芸高等学校 長野県須坂市大字須坂1616	農 業
12	丸尾直彦	36. 1. 6	大分県立佐伯鶴城高等学校 大分県佐伯市城下東町7-1	英 語

[ マレーシア・シンガポール班 ]

	氏 名	生年月日	所 属 学 校 所 住	担当教科
1	木 下 賢 三	23. 7. 4	愛媛県立中山高等学校 愛媛県伊予郡中山町大字出淵二番耕地105-10	社 会
2	野 津 明 美	38. 9. 10	島根県立江津工業高等学校 島根県江津市江津町1477	英 語
3	寒河江 松 夫	25. 4. 5	山形県立寒河江高等学校 山形県寒河江市六供町2-3-9	英 語
4	石 田 一 成	28. 4. 29	青森県立三戸高等学校 青森県三戸郡三戸町大字川守田字白坂の上3	社 会 (政経)
5	田 畑 正 村	31. 7. 2	石川県立七尾農業高等学校 石川県七尾市下町戊部12-1	農 業
6	服 部 好 美	34. 8. 13	三重県立飯野高等学校 三重県鈴鹿市三日市町字東新田場1695	英 語
7	山 本 泰 彦	32. 8. 22	福井県立敦賀高等学校 福井県敦賀市松葉町2-1	英 語
8	武 田 俊 太 郎	33. 6. 20	埼玉県立所沢商業高等学校 埼玉県所沢市林2-88	商 業
9	山 田 宏 治	17. 7. 27	私立横浜商科大学高等学校 神奈川県横浜市旭区白根7-1-1	英 語
10	渡 辺 紀 之	38. 3. 25	静岡県立吉原高等学校 静岡県富士見市今泉2160	社 会 (地理)
11	西 田 嗣 夫	11. 5. 24	奈良県立耳成高等学校 奈良県橿原市常磐町616	英 語

〔南米班（ブラジル・パラグアイ）〕

	氏 名	生年月日	所 属 学 校 所 住	担当教科
1	本 田 富 夫	22. 10. 21	徳島県立穴喰商業高等学校 徳島県海部郡穴喰町大字久保字松本1番	商 業
2	川 西 輝 道	15. 11. 5	高知県立須崎工業高等学校 高知県須崎市多ノ郷和佐田甲4167-3	工 業 (電気)
3	山 口 一 男	23. 4. 25	茨城県立猿島高等学校 茨城県猿島郡猿島町逆井2833-115	農 業



## 2. 報告

### (1) フィリピン班日程

年月日	日 程		宿泊（ホテル名等）
	午 前	午 後	
08.21(金)	10:00 東京発	13:05 マニラ着 JICA事務所で打合せ	チャーター・ハウス
08.22(土)	10:10 スモーキーマウンテン 見学 10:50 ホセ・リサール記念館 見学	マニラ市内見学	同 上
08.23(日)	10:30 マニラ発 11:40 セブ着	セブ市内見学	パークプレイス・ホテル
08.24(月)	09:30 セブ国立科学技術大学・ 協力隊員活動視察 10:30 セブ地方職業訓練セン ター・協力隊員活動視 察	セブ市内見学	同 上
08.25(火)	09:40 セブ発	12:30 パラワン着 14:00 ワニ養殖研究所視察	バジャオ・イン カーサ・リンダ
08.26(水)	08:00 パラワン発 09:10 マニラ着	14:30 社会福祉開発省マラテ 婦人職業訓練所・協力 隊員活動視察	チャーター・ハウス
08.27(木)	09:30 フィリピン大学理数科 教師訓練センター視察	14:00 フィリピン科学高等学 校視察	同 上
08.28(金)	09:30 土壌研究開発センター 視察	マニラ市内見学	同 上
08.29(土)	マニラ市内見学	14:20 マニラ発 19:15 東京着	

氏 名 下 地 弘 徳  
所属学校 沖縄県立北部農林高等学校  
担当教科 農 業



平成4年度国際協力事業団主催による高校教師海外研修が、さる8月21日から8月29日までの日程で行なわれました。研修には(財)国際協力サービス・センター、国際協力事業団北海道支部、それに北は北海道から南は沖縄までの高校教師合計14人が参加しました。

訪問国は、フィリピンのルソン島(マニラ)、セブ島、パラワン島の三島です。フィリピンは、ほとんどがサンゴ礁の島で約7000余の島々(そのうち11が主要な島)からなり、日本の北海道を除いた面積にあたり、気候は熱帯に属し、年平均気温は26~27℃、総人口は約6000万人、人々は活気があり、誰も皆気さくで明るく親しみを感じます。

今回の研修目的は、国際理解教育の重視の観点から、フィリピンでの国際協力現場の実状を直接視察し、今後の学校教育の現場に役立てる為のもので、フィリピンにおける主な研修先や内容についての報告をしたいと思います。

## I. 研修先(訪問)

1. JICAフィリピン事務所訪問
2. セブ国立科学技術大学訪問
3. セブ地方職業訓練センター訪問
4. パラワンワニ養殖研究所訪問
5. 社会福祉開発省マラテ婦人職業訓練所訪問
6. フィリピン大学理数科教師訓練センター訪問
7. フィリピン科学高等学校訪問
8. 土壌研究開発センター訪問

## II. 研修内容

1. JICAが協力している国際協力の現場視察
  - (1) 技術協力状況(専門家の派遣等)
  - (2) 青年海外協力隊員の活動状況
  - (3) 無償資金協力により完成した施設見学



## 2. 産業、社会、教育事情の視察等

### (1) JICA事務所訪問

私達研修団一行は、8月21日ホテルチェックイン後、国際協力サービス・センタースタッフの増田さんの案内で事務所を訪問しました。そこでJICAの柏谷さんより研修日程の説明があり、その後飯島所長から対比国JICA事業実施状況の説明を受けました。その中から主なものをあげると、研修員受入れ事業や青年招へい事業、専門家派遣事業、プロジェクト方式技術協力事業、さらに無償資金協力実施促進事業及び青年海外協力隊員事業等、数多くの協力事業分野があり、わが国がフィリピンの人々の為に今後も寄与していくこと、又フィリピンの今後の課題として、1.家族計画問題(人口)、2.治安の問題、3.交通問題、4.電力問題、5.貧困解消の問題等様々な難問を抱えているとのことでした。

説明を聞いて感じたことは、これらの問題解決には長い年月を要し「一朝一夕」にはできないことや、反面フィリピンの人々の生活向上の為にわが国があらゆる分野に寄与していることを改めて知ることができました。

### (2) セブ国立科学技術大学訪問

青年海外協力隊員の田中さん(自動車整備)、藤崎さん(電子機器)達の活動状況を視察する為、リゾート地として有名なセブ島にあるセブ国立科学技術大学を訪問しました。

校長先生の学校紹介によると、総合の国立短期大学で、中高等教育があり、さらに職業訓練、看護婦養成、教員養成等のコースも併設されているとのことでした。

大学は3年課程で、学年別の履修分野の例をあげると、1年次では工業基礎学習、2年次は専門分野、3年次で現場実習等があり、学生達は大変意欲的のようだ。又、両隊員は教師を重点的に技術指導をしており、その活躍ぶりを見て頼もしく思うと同時に、はじめてわが国の国際協力の現場を見ることで大変感動しました。

### (3) セブ地方職業訓練センター訪問

同じセブ島にあり、ここでも青年海外協力隊員の上野さん(電子機器→修理部門)の活躍状況を視察しました。この訓練センターは、技能訓練が主で(自

動車整備他)全国には14校あり、授業料は無料で4ヶ月単位のローテーショントレーニングで、有能な技術者を養成して社会に送りだしているとのことでした。

#### (4) ワニ養殖研究所訪問

パラワン島にあるワニ養殖研究所では、プロジェクトリーダーの村田さんから事業概要の説明を受けました。

説明によると、施設はワニを「絶滅の危機」から救う目的で、1987年8月に17億6000万円の巨費を投じて建設されたとのことでした。その後施設では、ワニ100頭、卵1300個(ふ化率60~65%)を養殖している。

将来は養殖したワニを自然に帰し、自然環境の中で人間とワニの生活環境のバランスが保てるようにしたいとのこと。その為には、ワニ養殖に対する地域住民の充分なるコンセンサスが必要条件となる。設立当初に比べて、現在では、これまでの地域住民へのキャンペーンの成果があつてか、ある程度理解を示してきているとのこと。

説明を聞いて感じたことは、近い将来共存できる環境が整い、自然とのバランスを保ちながら地域社会にも貢献できればと願ってやまない。

#### (5) 社会福祉開発省マテラ婦人職業訓練所訪問

この訓練所(日本の厚生省にあたる)では、青年海外協力隊員の高麗さん(食品加工、衛生等の指導)が活躍している現場で、所長の話によると、5つの局(婦人、障害、青少年等)があり、婦人局は女性の地位向上の為に1986年に開局したとのことでした。

現在プロジェクトとして、1.母子保健、2.環境衛生(ゴミ、水の問題)、3.女性向上(社会参加)等の問題に取り組み、又、全国にソーシャル・ワーカーを配置して、3ヶ月~6ヶ月単位のローテーションで指導にあたっているとのことでした。

#### (6) フィリピン大学理教科教師訓練センター訪問

専門家の日浦先生から事業概要並びに教育制度についての説明を受けた後、施設を見学しました。その中から主な内容をあげると、フィリピンにおける理数科教育に関する日本からの技術協力は1970年頃から始まり、今年で20年(停滞期を除いて)にもなるとのことでした。

訓練センターがフィリピン大学(UP)キャンパス内に設立されたのが1990

年、日本政府からの20億円余の巨額の援助で建設、鉄筋コンクリート一部4階建てで、図書室、ワークショップ、実験室、視聴覚室などを備えているほか、45床の宿舎もある。

このセンターは、現職教員の訓練のほか、大学の教育学部の教員志望者も養成している。全国から教師が泊まり込みで物理や化学、数学などの科目の再教育を受けている。政府が教師の再教育に力を注いでいる背景には、理数科教師の質が原因になっているようだ。

日浦先生によると、フィリピンの小中学では約8割の理数科教師が専門外で教壇に立っているとのことでした。

フィリピンの教育制度は、6・4・4制、義務教育は小学校の6年間で、この後にセカンダリーハイスクールと呼ばれる中等教育学校が4年間、さらに高等教育機関としての大学がある。就学率は小学校へは100%入学しても、卒業するのは60%、中等学校が50%、大学進学率20%で、わが国と比較して大きな相違点といえる。

#### (7) フィリピン科学高等学校訪問

国立(科学技術庁のハイスクール)で、将来の科学者、技術者を養成する学校で、全国から優秀な生徒達が応募してくるとのことでした。学校の特徴として、独自のカリキュラムを作成し、特に数学と化学を中心に履修させているようでした。進学先はフィリピン大学(UP)が90%で、残り10%が有名私立大学に進学している。

#### (8) 土壌研究開発センター

開発センターでは、チームリーダーの高橋さんから事業概要の説明を受け、その後施設を見学しました。説明によると、施設は無償資金の技術協力事業で、フィリピンにおける「土壌図の近代化」の為に29億円余の莫大な予算が投じられて建設された。近代化の主なものとして、1.アメリカの土壌分類方式採用、2.衛星イメージ利用、3.土壌及び肥料学の採用等により、着実に基盤整備が進められ多大な成果をあげているようでした。

又、フィリピンにおける将来有望視されている農作物として、1.キャッサバ、2.陸稲、3.キマメ等があり、プロジェクト終了後の研究成果の地域への普及に期待したいと思います。

## ○ 研修の全体的な感想

フィリピンの人々は、貧富の差がかなり激しいにもかかわらず、陽気で明るい。なんとなく明日は明日の風が吹くと感じているように思え、生活に全く暗さを感じさせない。又、フィリピンの女性は働き者だと聞いたが、あっちこちで子供を抱えながら働く女性の姿を多く見かけ、まさに男性より家族の為に女性が生活をエンジョイしながら家計を支えている印象を受けました。

研修期間中何度も耳にした言葉が、教員はローサラリー（安月給、日本円で3万円）でアルバイトをして生活を支えている教師もいるとのことでした。安月給を嘆いているが、現状ではどうしようもなく、あきらめを感じているようだ。

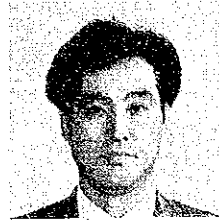
安定した収入を得る為、優秀な人材が特に英語圏のアメリカへ目が向いているようだ。今後のフィリピンの発展を考えた場合、人材流出は大きな痛手ではないだろうか。

短い研修でしたが、フィリピンの歴史や文化、産業、教育さらに政府開発援助の内容や国際協力現場、又、青年海外協力隊員の活動状況の現場等を視察することができて大変よかったです。この貴重な体験を学校現場で国際理解教育の為に活かしていきたいと思っています。

研修期間中、寺沢参事、山本課長をはじめ、増田さん、研修団員の諸先生方と交流を深め、大変有意義な研修ができたことを心から感謝しています。

最後に、この研修の機会を与えて下さった国際協力事業団の関係者並びに私達研修団一行の現地受け入れでJICAフィリピン事務所の飯島所長をはじめ関係者に深く感謝を申し上げますと共に、今後ともこのすばらしい研修制度が継続されることを期待し研修報告と致します。

氏 名 高 田 幸 一  
所属学校 東京都立志村高等学校  
担当教科 保健体育



## 1. 視察などに際して特に主眼をおいた点

国際理解教育の現場におられる教師の方々は、どのような視点で国際協力の現場を見つめ感じることができるのか。

現任校でも高校生とフィリピンへ共に行く機会があるが、自ら企画しないで実施案で行動すると、どのようなことが気になるのか。

## 2. 国際協力の現場で

### (1) 参考になったこと

#### <参加した立場で>

国際理解教育にたずさわっている高校の教師も、実際に外国に行って実際に肌で体験しないとできないことが多いものだと感じた。

このような事業は、実際にはすぐ成果はでないものである。是非継続して行って欲しい。私自身もこれからも継続していく決意のようなものができた。

今回参加した先生方は、自らの研修体験を生徒に伝えて欲しい。また日本の高校生の足りない面を逆に認識できたのではないかと考える。夜の反省会などでは、日一日と先生方がフィリピンに親しんでいく様子を感じとれて嬉しかった。

連れて行ってもらえる事は、楽ではあるが、ともすると見るべき視点も安易な方に流れてしまう。この事を再確認できた。

#### <現地を視察して>

定着して、又は継続して、途上国に協力関係を維持できる人物なり、企業を育成する難しさを感じた。日本の資金援助の多さに驚いた。これらの事業を日本のどれだけ多くの人が正しく理解し応援してくれるのか、またフィリピンの人々にどれだけ知ってもらえているのか、喜びと同時に困難さを痛感した。

政治や行政の場でプランを作成する人、又、実際に現地で業務を行う人の意識や考えがなるべく一致できる事が大切なのだと感じた。

共通理解が、どこかの点で自由にフィードバックをはかれるシステムが、時間的、資金面、人材的にも必要なのではないか。

現地の緊急事態、変化にすぐ対応していける、問題提起録のようなものがすぐ閲覧できるとありがたいと思う。

専門家の方々の仕事に対しては、仕事に誇りを持っている方が多くうれしかった。存在感があった。

「隊員と話ができてよかった」と多くの参加者に言われたが、私自身もいきいきした隊員と話ができて良い時期に良い人と出会えた。

途上国で感じる事であるが、子供達の目の輝きを見るにつけ、日本の生徒に本当に教師として、何を今伝えなくてはいけないのか再確認できる。

## (2) 気になったこと

### <参加した立場で>

国際理解教育にたずさわっている高校の教師が、フィリピンの現状を知らないという事に少し驚いた。(アセアン招聘の日本側の教師と同じように日本の国を知らないという事と、研修国の実状をもう少し知って欲しいと感じた)

### <現地を視察して>

基本的に、人材育成には時間と金を投資する事が大前提なので、許す限り継続させる事が必要と考える。

国際協力事業団のODAに対する事業内容や、青年海外協力隊事業については、都及び各県の教育委員会にいままで以上に情報を流し、たとえば、どの課でどのように考え、どう協力できる体制があるのか、独自にきめ細かい情報を収集している事を生かして欲しい。

国民の支持をもっと得ても良いのではないか。この事業は、PKOの自衛隊のようであってはならないと感じた。国際協力事業団の協力隊とPKOの自衛隊をかなりの人が混同する時期があった。

特にさしさわりのない問題点の部分を事業団側より選び、もう少し公開し

て欲しい。(事業内容を説明されても、実際業務を行うにはどのような問題があるのか、すぐに理解されていないような気がする)

今回のように、多くの先生方も実際に行ってみてその問題点や矛盾等が理解できたと答えている点を考えると、一般の人々にはもっとみえにくい事なのかもしれないと思う。

問題提起をいままでの市民討論会や学校で公開講座を継続して開き、理解協力がえられる時期であり、国際協力の意識を高められる。近い将来、ますます応援参加支持してもらえる世論を形成できるのではないかと考える。

興味関心の意識レベルが大きく拡大されて、そのレベルに合わせての問題提起が必要なのかと思う。

東京都の場合は、国際理解教育を都の教育目標の一つにあげているが、国際化と言われて歴史が浅く、日本の国際化はまだ始まったばかりである。それでもJICAの名前はようやく認知されるに至った。国際化に関する研修会では、問題意識を持たないで参加する場合も多く、一般論的な国際化に関する研修会は、研修会のための研修会に参加するといったものになりがちであり、形骸化をまねく恐れがある。

時間的に理解を急ぐのは上層部の方であり、生徒の方は柔軟性があり、いつでも先生方次第という面があるので、いままでと同じように両面から考えて続けて欲しい。文部省が実施している海外派遣事業も同じように考えられる。

この海外研修は、視察から体験学習の意味合いを少し入れてもいい時期と考える。

### 3. わが国の協力ぶりを各方面で紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

青年海外協力隊事業の活動状況を学校の現場へもっともっと広報して欲しい。国際協力事業団、政府事業、イコール自民党、反対と言う概念を未だに持ち続けている人も多い。日の丸・国歌反対のイメージで生活しているところもある。国際化とどのようにつながるのか考え込んでしまう。

異文化のなかで活動する事は、宗教、文化、歴史的背景を理解した上で越えなくてはならぬ事、越えてはいけない事がある。単純に当てはまる事ばかりではない。このような作業をして活動を行っている事を、体験をしていない人に

も理解されるものでなければならない。

上記したように人作りは、特に異文化と接している事業は、悠久の時間が必要と思う。

日本の協力の基本的な考えを世界に日本国内に全面に強く打ち出して欲しい。矛盾するが政府事業でもある、企業との関係も複雑にからみ、きれいごとばかりではないが、バランス感覚のとれた、世界をリードしてゆく平和的技術協力姿勢、また要請にあった草の根的な協力援助をおこなっているのも、新聞、マスコミは定期的に報道して欲しい。

#### 4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

普通科高校から工業高校に異動し、工業科の技術を持った生徒を国際化のなかで育成したい、接してみたいとも考える。職業科の生徒を実際に教えて海外へ目を向ける、そのような展開を今後してみたい。姉妹校制度などを利用してアジアの若者との交流をぜひできるところから無理のない体制で活動して行きたい。

教師の立場での啓蒙活動も大切であるが、指導主事などの行政の立場から国際理解を押し進めてみたい。文化祭、ホームルームの学級通信で生徒にいままで以上に具体的に報告したい。協力者を継続して育てて行きたい。

#### 5. 所感および意見

##### (1) 研修時期および期間

航空券が安くなる時期で、多少こみあうが、多くの教師に参加してもらえるには良いのではないかと考える。

個人的には短いと思うが、まわりを見ているとこの日程がいいのではと思う。

##### (2) 研修日程および訪問先

無理のないとても良い日程だった。現地で誇りを持って働く人々と接する機会があまりないと思うので、今回は良かった。

アセアン招聘事業と同じで、都市部よりは地方の方が現地の人々の生活がよりよく理解できるのではないだろうか。都市3：地方7の割合が、とても移動しやすく比較できる。



訪問先の協力隊員の活動は、表情からはもちろん、所属の上司の応対や雰囲気、受け入れ状態、仕事の進行状況が伺われる。うまく行っていると感じられる人や、何となくここにいて良いのか、と思われるような訪問先もある。

その事について、きちんと研修者とディスカッションができればより協力隊員が抱える多くの問題点と、途上国の抱える問題点を話す事により、理解が深まり、問題点が一層明確になり、有意義と考える。

(3) その他全般的な所感

体験を入れるともっと現地の事が理解できるのではないかと考える。

例えば

午前中	訪 問	(安全な地域では)
午 後	グループ別体験	まず両替、銀行に2行以上 日本円の扱い方
午前中	訪 問	
午 後	グループ別体験	大型スーパー 価格調査
都市と地方の価格の差		どこのメーカーなのか 15品目
午前中	訪 問	
午 後	グループ別体験	地方の市場 価格調査
共通品目を選ぶ		どこのメーカーなのか 5品目
午前中	訪 問	
午 後	グループ別体験	バス路線を選び
交通機関の運賃形態		始点から終点までもどる
自分で地図を買いに行く		
1ヵ所ぐらいは、グループ(何もせず添乗一人)で訪問させる。		

<全般的な感想>

このたびフィリピンを訪れる機会を与えてくれた事に対してJICA(国際協力事業団)に対し心から感謝いたします。

今年の8月21日から8月29日までフィリピンに海外研修を全国の教員と共に地方の視察を含め本当に一つ一つを確かめながら有意義な研修をさせていただきました。

4年ぶりのフィリピンです。胸がわくわくしました。「どんな風に街並は、変わってるかな」「アキノ政権からラモス政権にかわって、どのように変化したのかな」「生徒と行った、マラカニアン宮殿はどうなっているのか」思いがわいてきました。協力隊員には、今年4月フィジーに旅行でいき、お会いする機会に恵まれ、色々お話を聞き、海外で働く事の喜び不安などをお聞きして、指導に対する思いを新たにしました。

自然のすばらしさは地方に行けばいくほど人々との生活に溶け合ってフィリピンらしさを持っているように感じます。私が子供の頃に感じた風景や匂いがあの国に行くに残っているような気がするのです。

たくましく働く子どもたちは、困難にも生きる選択をつねにせおっているが、明るくにくめない目の輝きに、ここを訪れるたび、日本に帰ってからの生徒指導の原点を考えずにはいられない。そしてまた子供達の目の光の強さに、何故かうらやましさを感じ、「今回も受けるのだろうか」そのような思いで出発の成田に向かいました。帰国の際もこの思いを同じように早く生徒に伝えたいな、という思いでした。

#### <飛行機内で>

フィリピン航空は、21日からの旅行者の第2のピークを迎えロビーも機内も満席の状態でした。

その国の航空会社を利用する事は、まずその国の利用者が多く、お国柄が比較的あらわれ楽しいものです。研修の先生方とは、グループごとに分かれマニラまでの4時間のフライトでした。

当然ながら電気製品を手にいっぱいに持つフィリピン人帰国者の多い事、そして、フィリピン人の奥さんと思われる人と日本の男性とその子供づれの多いのはびっくりしました。お母さんと子供と仲良しで、しかし機内では、厳しい躰をしていたのには、かつての母親のイメージが浮かび、電車の車内で自分の子供に注意もできない甘やかす日本の若い母親をだぶらせて少し考えてしまいました。

国際理解教育として海外研修をしに行くのに、国内の身近な所で国際交流がすでに浸透しているのだという思いと「近い将来は、フィリピン男性と日本女性？」等と余計な事を考えたりもしました。これからの人々は、国境という境がますます無くなって行くのかもしれない、そんな気がしました。

ショーダンサーと思われるグループの顔には、母国に帰る安堵感と安心感があらわれていて、とても解放的な雰囲気の中の様子でした。帰国の機内は、今度は、日本へ出稼ぎに行くフィリピン人たちの不安な表情、また里帰りを済ませた親子連れと色々な人生を運んで楽しい思い出となりました。

#### <マニラ空港について>

多くの先生方と同じように、のんびりした雰囲気から、急に途上国独特の騒然とした行き交う人々の波、音、匂い、隙があれば何でも持って行かれそうな目と目、思わず構えてしまいました。

途上国らしく、空港からでるのにかなり色々な事があり、人数も大勢であったので、JICAの車にのったのは予定より1時間ぐらい遅れてのものでした。

そしてホテルと、今度はチェックインにも手間取りまた1時間と、この頃になると慣れない事もあり、緊張の度合いが極に達している先生もおられました。

JICA事務所への表敬訪問でフィリピンの国内事情を説明され益々不安になった先生もおられたようです。

クーラーの音に少し悩まされましたが、一人になると久しぶりで「フィリピンだ、フィリピンだ」と叫び、テレビを見たり、なかなか興奮して寝付かれませんでした。

生き方になんでもありの世界(途上国)では、人々は、とても遅しく、したたかに生きる。自分自身になにか生き抜くものがないと、自分を見失ってしまい生き抜けない。緻密すぎても、ルーズになりすぎてもいけない。心も体も柔軟性が必要、また発想の転換が大切。不思議な国・フィリピンは、表面はあまり変わっていませんでしたが、交通渋滞はますますひどくなり、相変わらず排水の状況がよくないので雨がふればすぐ道路は水浸しになったりするが、街は綺麗になっていくにもかかわらずマニラがマニラでなくなって行くようです。農村も農村でなくなっていく気配がみえる。10年くらい前のタイのバンコクのようにも見える。

#### <訪問先で>

どれも多くの問題や課題を抱えており、この紙面では書くことのできない要素も含まれている。人と人のつくる関係に終わりはなく絶えず新しく築いていくものではないかと、今回参加して感じたものがあった。もう一つには、華僑パワー

の大きさ、定着し根付くものだけが発揮する力、まあ力の意味は異なるが、日本人の国民性も考えさせられるものがありました。

香港、台湾、韓国、日本とアジアの中で、何を求められているのか。

色々なレベルでの援助、きめ細かな質への転換、出せない金を出さない決断も必要なのかもしれない。金の切れ目が縁の切れ目であってはいけないなあ、などと考えてしまうこともあった。

途上国に行くと、豊かであると言われている日本の、足りないところがみえる。浮かれていないで、フューチャーショックなるものを足元をしっかりと見させてもらえる研修だったように思える。

最後にあたり、今回の研修旅行に日本側で調整にあたられた方々、また現地のJICA事務所のスタッフのみなさん、協力隊員、専門家の人々、同行されたサービス・センターの山本さん、北海道支部の寺沢さん、ありがとうございました。

氏 名 佐 川 昭  
所属学校 大阪府立西淀川高等学校  
担当教科 英 語



## 1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

ODAによって作られた施設並びに専門家、協力隊員の活動の実態を見ることが。フィリピンという国名を聞くとマイナスのイメージを持ってしまう日本人が多いのではないだろうか。でもその実際の姿はどうなのだろうか。それを自分の目で確かめてみようと思った。

## 2. 国際協力の現場で参考になったこと、気になったこと

マニラ、セブ、パラワンと3つの地域を訪問したが、どこでも青年海外協力隊員の活動には頭の下がる思いがした。現地にとけこみ、現地の人々と同じ生活をし、同じ視点でものを見るという、正に草の根レベルでの交流の実践を行っている彼らの姿。口で言うのは簡単だが実行するのは本当に難しいことだ。

セブ国立科学技術大学では、授業の様子を見学することができた。自動車整備や電子機器など実用的な分野での技術協力が行われていた。理数科教育の遅れている現状を考えると、えりすぐられた生徒達が進学してきているわけだが、藤崎隊員（電子機器）によれば、例として説明した配線は理解できるが、少しかえたりするとそれを応用することは難しいということだった。

予定にはなかったが、国際協力サービス・センターの山本氏のはからいで、英語の教員と交流することができた。たまたま試験の時期と重なっており、授業そのものは見学できなかったが、授業の内容を聞けたり、試験問題をもらうことができたりして大変参考になった。フィリピンでは小学校から英語教育が行われており、日常使う言語でもあるので日本とは多少事情が違うが、それだけに興味のあるところでもあった。grammar, oral, communication, literatureに加えて、technical termという授業があり、自動車、電気、看護等の各学科の専門用語を学ぶもので科学技術大学ならではの科目だった。

大学で出会った生徒たちや先生方がみんな笑顔で迎えてくれ、フィリピン人の明るさや陽気さにふれることができた。しかし帰る前にあるフィリピン人の

先生が、日本の援助に対する感謝の言葉を述べた後で、「私への援助はヤマハのピアノがいいな。5000ペソだ」という冗談を言った。その場は一同大笑いで終わったが、我々も金持ち日本人の一員だと思われているのだと考えると、少し複雑な気持ちになった。

### 3. 我が国の協力ぶりを各方面で紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等 フィリピン大学理数科教師訓練センター

日本の援助は経済力にものを言わせて、高価な機材等を無償供与しているかのような印象を持たれているが、単なる物的援助だけをしているのではない。フィリピン国内での人材育成を目的としたフィリピン大学理数科教師訓練センターは人的援助の代表的なものであろう。

フィリピンの学校教育、生徒の現状は日本とは比較にならないほど厳しいものがある。1992年4月Manila Bulletin紙によれば、義務教育の小学校6年間を終了できる子供は全体の65.7%、ハイスクール(日本でいえば中1～高1の年齢にあたる)への進学者は50%にも満たない。しかもそのハイスクールで物理を教えている教員のうち、大学で物理を専攻した者は5%に過ぎず、他の95%は大学で物理を学んだことさえもない。化学、生物はまだましな方だが、それでも20～50%で、大半は無資格の教師が理数科を教えている。レストランでボーイがお釣りの計算ができないのもうなずける。(もっともこれは欧米でも似たようなものかもしれないが)

従って、生徒の教育以前の問題として理数科教員の養成ならびに現職教員の再教育をする機関の設置が急務となる。そこで1990年に約20億円の無償供与でフィリピン大学理数科教師訓練センターが設置された。ここでは東京学芸大学の日浦賢一先生を中心とした数名の日本人スタッフの指導のもと、理科、数学の教材開発、教員研修、教科書作成などを行っており、フィリピン理数科教育の中核部分を担っている。将来的にはフィリピン人の指導のもとにフィリピン人の手で理数科教育を推進していくことが期待される。日本人はすぐにお金をかけた分の見返りを求める傾向にあるが、即座に数字に表れるものではない「人」を育てる分野での協力については、10年、20年を単位とした長い目でその成果を見守っていくべきではないかと思う。

#### 4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

2学期最初の授業で、今回の研修旅行について話をした。フィリピンについては、ほとんど予備知識のない生徒が大部分だったが、比較的熱心に聞いてくれたようだった。中には感動のあまり、家に帰って授業のことを全部話したと言ってくれた生徒もいた。東南アジアには関心のうすい生徒の方が多いとは思いますが、このように授業で自分の直接経験したことを話すことでアジアに触れるきっかけを与えてやり、それがもとでその国について知りたいと思うようになれば、生徒は国際理解への第一歩を踏み出せるのではないかと思う。また、今後扱う教材の中にフィリピンの言語事情について触れている課があるので、その時にまた今回の経験を話してやれればと思っている。

#### 5. 所感および意見

研修時期および期間は、帰国後新学期までの日数がないという点を除けば適当だと思う。日程についても無理なく組まれており、効率的にスケジュールがこなせたように思う。また、いろいろな教科の教員が参加しているということから、訪問先が一分野に偏ることなく組まれており、現地の大学、高校を訪問できたことも大きな収穫だった。協力隊員との夕食会では、公式日程の限られた時間内に聞けなかった仕事上の詳しい話や生活のことがわかって大変参考になった。

初めてニノイ・アキノ国際空港に着いた時、雑然としたその雰囲気は何とも言えない重苦しさを感じた。治安が悪いというイメージともあいまって自然と警戒心を強めてしまったようだ。しかし滞在しているうちにその気持ちも薄れていき、次第に親しみを感じるまでになっていった。マラカニアン宮殿近くの大学街で見かけた学生たち、渋滞の中、物を売りに来るストリート・チルドレン、スモーカー・マウンテン付近のスラム街の子供たち……どの笑顔もいきいき輝いているように見えてならなかった。社会福祉省マラテ婦人職業訓練所所長やフィリピン科学高校校長の言葉には、社会に参加している女性の代表としての力強さと自信を感じずにはいられなかった。だが、その一方で昼間から何をするともなく道行く人をただ眺めているだけの若者たちが数多くいることもまぎれもない事実である。この厳然と存在する貧富の差をどのように埋めていけばいいのか。それは果てしない道のりではあるが、JICAのプロジェクト

トをはじめとする国際協力によって実現されていくことを願ってやまない。

最後になりましたが、今回の研修旅行に際し J I C A の皆様をはじめ、同行いただいた寺沢氏、山本氏、また現地で御世話いただいた増田氏ならびに関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。



氏 名 松 田 昭 二  
所属学校 宮城県立泉高等学校  
担当教科 英 語



## 1. 視察等に際しとくに主眼をおいた点

### (1) フィリピン学校教育（特に外国語教育）の現況視察

7100余りの島からなるフィリピン。130以上の言語の中で、1946年タガログ語が国語として採用され、急速に普及しているとは言いが、事実上の共通語は英語であると言う。私の専門であるその英語の教育、外国語教育の現状を見たいと思った。

### (2) JICAが実施している国際協力の現場視察（専門家、協力隊員の活動、無償資金協力による施設等）

宮城県高等学校国際教育研究会の幹事の中にも、青年海外協力隊のOBがいる。毎年、高校生の、そして教員の研修会等で、講師として来ていただく協力隊員OBの方々の話にいつも感動を覚える。JICAの映画で見た協力隊員の活動に涙する時がある。彼等の活動をこの目で見たいと思った。

### (3) フィリピンの産業・社会事情の把握

特に、トンド地区ゴミ投棄所、スラム視察。そして、久田恵著『フィリピンを愛した男たち』（文芸春秋）のジャパゆきさんの故郷をこの目で見たいと思った。

## 2. 国際協力の現場で参考になったこと、気になったこと

### (1) JICAの役割は人材養成と理解する。

正直言って、JICAの事業がこれほどたくさんあるということがわからなかった。①研修員受入事業 ②青年招聘事業 ③専門家派遣事業 ④プロジェクト方式技術協力事業 ⑤開発調査事業（フィリピンマスタープラン作り） ⑥無償資金協力実施促進事業 ⑦青年海外協力隊事業などJICAの事業が多岐に渡っているということがわかった。またJICAの役割についておおいに勉強になった。つまり、JICAの事業の基本が、開発途上国の国造りの主体となる人材の養成であるということがよくわかった。

(2) フィリピン人のたくましさ

吐き気しそうなトンド地区、スモーキー・マウンテン、その極貧の中でも明るい笑顔が忘れられない。雨が降るとすぐ洪水、床下浸水、道路も路地も川のようになる。それでも、水溜まりを見つけては手製のおもちゃの船で遊ぶ子供たちの逞しさ。プロのチームがあるくらい盛んなこの国のスポーツ、バスケット。貧弱なバスケットボードでも元気に遊ぶ子供たち。ジープを改造したジープニー。オートバイにサイドカーをつけたトライシクル。自転車にサイドカーをつけたペディキャブ。どれもがこの国の逞しさの一例だと思った。マニラ市内を走る何台かのバスの扉に、日本語で『自動ドア』と逆さまに書かれてあった。たぶん日本から輸入したもので、必要な部分として逆さまにして使っていたのだろう。全国労働青年評議会セブ地方職業訓練センター（NMYC）で見た、不要となった鉄骨、鉄板を使い、電気溶接によって、車の枠組みを造っていたのには驚いた。

(3) 日本の良さの再確認

フィリピンと日本の教育の水準の違いにあらためて驚いた。戦後の日本が急速に発展できたのも国民全体の教育の下地があったからだ、フィリピン大学理数科教師訓練センター（STTC）日浦賢一専門家の話に納得した。紙の質が悪いのにも閉口。レシートやコピー用紙はまだ良い方だが、学校のテスト用紙が一番ひどいと思った。

(4) 青年海外協力隊員と技術専門家の待遇

派遣の目的が違うから当然なのだろうが、彼らの話からどうも待遇の違いが過ぎると感じた。それにしても、現地の水で肝炎をおこし、入院するほどだったが、1ヶ月も過ぎるとすっかり慣れてしまったと、話す協力隊員の屈託のない笑顔には、またまた感動してしまった。

(5) 何かアンバランスな国…… フィリピン

\*12時間停電、工場閉鎖などの電力事情と使っていない原子力発電所

（事実、セブ島のホテルで5分間位の停電があったし、マカティのあるオフィスビル、台風のためだったか、ビル全体が停電だった。このような電力事情にもかかわらず、アメリカが造った原子力発電所は使っていないという。）

\*スモーキー・マウンテンのブラックとコリエティアンガーデンの超高級住

宅

(バラックの家はスモーキー・マウンテンばかりとは限らない。いうならば、いたるところで見かけた。川岸と建物の間のわずかばかりのスペースにも、橋の下にも、まさかと思うところにも『家』はあった。その証拠に、大家族でも住んでいるような洗濯ものがたくさん干してあったからだ。それに反して、コリエティアンガーデンの超高級住宅は二重に石の塀がまわされていた。)

\*サンパギータ(国花)を売るストリートチルドレンとベンツが9台ある家(ついにサンパギータの樹を見ることができなかったが、マニラあたりで売られているのは、マニラの東南、約100kmのバグサンハンあたりから来るらしい。サンパギータ1つ売って、1ペソ。どれだけの儲けなのかわからないが、夜の11時頃にも見かけたし、雨の中でも声をかけてきた。新車のカローラやサニーあたりで200万円であるから、ベンツでは1000万円はする。それ1台買うのですら、普通のサラリーマンなら50年分の収入である。)

\*レーザーディスク、衛星放送、携帯電話と水道も電気もない学校(セブのホテルではレーザーディスクの映画を見たし、衛星放送の番組もあった。レストラン『たかやま』で見かけた女性は携帯用の電話を使っていた。ところが現在でも48%の小中学校に水道が、61%の学校に電気がないという。)

\*コンピューターと $1992-1947=39$  ,  $1/2 + 1/3 = 7$  の謎(もちろん銀行、デパート、研究所ではかなりのコンピューターが使われていたが、エルミタ地区で会った14才の女の子は、上記のような計算をしてくれた。)

### 3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

今回の研修旅行で訪れた全ての場所で、JICAの役割を『開発途上国の発展のキーポイントは人材育成=教育である』と理解した。特に印象に残ったプロジェクトの1つは、フィリピン大学理数科教師訓練センター(STTC)であった。ここで、私の目的の1つであったフィリピンの学校教育の概況を知ることができた。それは、知れば知るほど驚くべきことばかりだった。<教室不

足>ミンダナオ北部の国立ハイスクールでは、5000人の生徒をかかえ、授業数が60に対して、教室は36しかないという。しかも、1クラス60~70人であるという。<教科書不足>教科書はたいてい2人で1冊。地方では教師しか持っていない所が多いという。<教科書の内容>アメリカの教科書をそのままコピーしたのが多いという。<教師の質>ハイスクール(中等教育)で物理を教える教師のうち、大学で物理を専攻した者は、全体のたった5%にすぎないという。つまり、資格のない教師が理数科を教えているという。多くの学校には理科実験室も無く、機材もない。たとえ日本からの援助で、学校が建てられても、機材が入っても、48%の学校で水道がなく、61%の学校に電気がないとしたら、いったい何ができるのだろうか。日浦先生は1~2年の短期のプロジェクトではなく、10年、20年の長い期間の援助が必要だという。しかも、教育こそ、今フィリピンで必要なのだと。

私は、この研修を通してたくさんの人々と会うことができました。そして、彼ら一人一人の情熱に感心してまいりました。以下はこの研修中に会った青年海外協力隊員や技術専門家の人たちです。

- 8/24 セブ国立科学技術大学 C S C S T  
 Mr. FLORENINO DIAZ, College President  
 田中 修 青年海外協力隊員(自動車整備)  
 藤崎隆志 青年海外協力隊員(電子機器)
- 8/24 全国労働青年評議会セブ地方職業訓練センター NMYC  
 Mr. TEODORO S. SANICO, Regional Director,  
 上野純一 青年海外協力隊員(電子機器)
- その他 中濱正吾 青年海外協力隊員(水産物加工)  
 伊藤一義 青年海外協力隊員(水産物加工)  
 伊藤 陽 青年海外協力隊員(養殖)  
 斎藤 充 青年海外協力隊員(動物学)ポロンゴ島バードサンクチャリー  
 笹森 聡 青年海外協力隊員(生態学)ポロンゴ島バードサンクチャリー
- 8/25 ワニ養殖研究所 C F I  
 村田隆一 プロジェクトリーダー  
 坪内俊憲(徳島出身)、三品裕昭(気仙沼出身)、佐竹 靖(久米島出身)

- 8/26 社会福祉開発省マラテ婦人職業訓練所 D S W D  
Ds. BELINDA C. MANAHAN, Director  
高麗典子 青年海外協力隊員(食品加工)
- 8/27 フィリピン大学理数科教師訓練センター S T T C  
Prof. PORFIRIO JESUITAS, Director  
日浦賢一 専門家  
成清勝博 専門家(コンピュータ教育)
- 8/27 フィリピン科学高等学校 P S H S  
Dr. VICENTA REYES, Director
- 8/28 土壌研究開発センター  
高橋達児 チームリーダー  
奥田実行 プロジェクト調整員
- (その他) 木沢賢司 青年海外協力隊員(システム・エンジニア)(パターンガス)  
浦賀昭代 青年海外協力隊員(日本語教師)(ダバオ・ミンダナオ)  
白井早苗 青年海外協力隊員(陶磁器)(オロキエタ・ミンダナオ)

#### 4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

12月2日に行われる宮城県高等学校国際教育教員研修会で、また、平成5年6月福島で開かれる東北大会で、ビデオと写真を使って、報告発表する予定である。また、同研究会の機関誌に、本校の生徒会誌に報告文を寄稿することになっている。現在、研修会で体験したことを、通常の授業の中でどう生かすか検討中である。

#### 5. 所感および意見

##### (1) 研修時期および期間

東北・北海道地区では8月下旬に学校が始まりますので、出発日をもう少し早めていただければ良いと思います。また、期間としてはちょうど良いのではと思います。校長、教頭、県教委の配慮もあって『特休』から『出張』扱いにしてください。

##### (2) 研修日程および訪問先

毎日余裕のある研修日程で、訪問先も多方面にわたっており、JICAの

事業内容を理解するのに大変良かったと思います。

(3) その他全般的所感

何年前、県の教員研修会で、ルーベン・アビト先生の話聞いたことがある。その中で、私たち日本人は、どうもマゼランの視点から見ていて、決してラブラブの視点からは見てはいないという話を聞いた。つまり、世界史の英雄、マゼランはマクタン島で原住民のラブラブに殺され、世界一周はできなかったわけですが、フィリピンにとっては、ラブラブこそが英雄であって、マゼランは単なる侵略者にすぎなかったわけです。でも、結局、わたしたちも世界的英雄マゼランの目で物事を見てはいなかったか。今回の研修旅行を通して、多くのことを学ぶことができました。そして、少しでもラブラブの視点からフィリピンを見ることができるようになったと思います。

世界の開発途上国で貢献している日本の技術協力の内容、その発展のため日夜尽力されている J I C A 職員、専門家、青年海外協力隊の様子を、一部ではあったかもしれませんが、見聞きすることができました、これらの貴重な体験を今後の教育活動に生かしていきたいと思います。

最後に、このような研修を企画された国際協力事業団、同行してお世話していただいた山本さん、寺沢さんをはじめ、J I C A マニラ事務所の皆様に対して、心から感謝いたします。

氏 名 野 場 勇 吉  
所属学校 岩手県立盛岡商業高等学校  
担当教科 英 語



## 1. はじめに

開発途上国の実情、特に東南アジアの状況を知ることは日本の「国際化」を考えるうえで非常に重要になっている。現に日本に滞在している外国人の多くはそういう国々からやってきているからである。

そういう人々の本国での暮らしぶりを出来るだけ見て来たいと思ったが、短期間の日程の中で体験できることはもちろん限られている。JICAの方々や行く先々の専門家や青年海外協力隊員の方々の説明がそれを補ってくれた。ここではそれぞれの施設で特に印象に残ったこととフィリピンの国内を旅行して感じたことをおりませず報告としたい。

## 2. 国際協力の現場で

セブ国立科学技術大学とセブ地方職業訓練センターでは自動車整備と電子機器の分野を中心に見学した。職業訓練センターはもちろん、大学も基礎的な研究よりも実用的な技術の向上を目指しているようだ。就職難で大学を出てもたいへんなのだという。職業訓練センターには生徒達が溶接して作ったトタン板むき出しのようなジープの車体があった。同じような車を街で何度もみかけており、なるほどと合点する。中古車をよみがえらせる技術はひょっとして世界一ではないのか。街には板金屋とも鍛冶屋とも見えるような小さな作業場が数多く見られ、きらびやかな乗合自動車ジープニーも、自転車を改造したペディキャブも、100cc前後の中古バイクを改造した屋根付きサイドカー、トライスクルもいかにも手作りに見える。

プエルト・プリンセサのワニ養殖研究所ではワシントン条約に基づく絶滅に瀕した種の保存の一環としてワニの養殖に取り組んでいる。ワニに関する専門的な説明に引き込まれると同時に、国際協力の多様な形態を考えさせられた場でもあった。将来的には地元の民間事業として育成することで地域社会に貢献したいという。一部高官だけで下まで届かないという批判に対して草の根的な

技術協力を目指している。(幸いワニのウエルカム・ジャンプに見舞われることはなかった。)

マラテ婦人職業訓練所では食品加工を初め縫製や手芸などの教室を見学した。教育の機会に恵まれなかった人々が多く、保健衛生のテキストは文字が読めなくてもイラストで理解できるようになっている。この婦人の訓練所で、くしくも男性のことが話題になった。男が変わらなければこの国は変わらないというのである。その日暮らしに起因するのだろうか、金が入れば働かず遊んで暮らす男が多いという。確かに日中、数人の大人が何をすることもなくたむろしている光景をあちこちで見かける。しかも家庭の経済力にそぐわぬ子供の数、物売りの子供が多い所以である。

フィリピン大学理数科教師訓練センターは広大なフィリピン大学の敷地の一角にある。すばらしい施設で、立派な印刷所を持ち、様々な出版物もセンター内で印刷できる。各地区の指導主事級の人が研修や教材作りをして地域に帰り、その先生方に普及するのだという。この時はフィリピンの先生だけでなくオーストラリアからも教材作りのために来ていた。

ここでは丁寧な資料に基づいてフィリピンの教育事情一般の説明もしていただいた。就学率の低さ、文系と比べて極端に低い理系のレベル。そもそも長い間続いた植民地政策が自立するための教育を阻んできたのではないか。義務教育となっている小学校を卒業するのが60%台という状況は、明治初期に義務教育が定着した日本と比べれば100年も遅れている。劣悪な学習環境のもとでどう実りある教育をするか。電気も水道もない学校でどういう理科の実験が可能か等々、様々な課題がある。日本政府は台風能耐えられる学校の建設も計画的に進めているという。まさに教育は国造りの根幹に係わり、しかも非常に根気のいる取組みである。

フィリピン科学高等学校は台風のために休校となり、残念ながら授業を見ることは出来なかった。全国の各小学校の上位5%以内の受験生約1万5千人を対象に二次の選考試験を課し、240人を選ぶ超エリート校である。理科の実験を中心とした卒業論文を課しており、日本の進学校とも少し違うようだ。ホールのベンチでおしゃべりしたり、ノートを開いている寮生達の様子は、ちょっとおとなしく真面目な感じの中学生である。この学校の生徒には政府の奨学金が完備しているという。



土壌研究開発センターではコンピューターによる土壌図を作成している。ピナツボ火山灰泥流の被害地予想が的中し注目を集めているという。日本の普賢岳の状況との比較もたいへん興味深い。

施設もすばらしいが、その施設を十分に活用していることを強調していた。ピナツボ火山の仕事ではフィリピン人のスタッフも超勤手当の支給すらなく夜を徹し、休日もなく作業に従事したという。それまで感じていた一般的なイメージとは違うフィリピン人の一面があった。これも教育を受けた者とそうでない者との違いではないのかと思われる。

### 3. 研修全体を通じて思ったこと

世界各国の援助のうち60%が日本で、現在、専門家46名、中長期専門家44名、青年海外協力隊員85名がフィリピンに滞在しているという。予想以上の援助内容である。実際に各現場を見学し、一般に言われているよりもはるかに綿密な援助を展開していると思う。

だがそれもフィリピンの政情が安定し、フィリピン人自身の向上努力がなければ一瞬にして水泡に帰することもありうる。ビルの前には必ず銃を携帯した警備員が居り、デパートでさえ中に入るのにチェックされるという物々しさに不安を感じる。ラモス政権は国内の治安に努めており、多くの国民の支持と期待を担っているが、ことはそう簡単ではないようだ。

都市生活者でも月収2万5千円位で、トンド地区にはスラムがはり付き、高級な地区と言われるマカティでさえ、夜、路上に寝ている人がいる。働き盛りの男達がぼうっと道路を眺め、路上には4車線の車の間を縫ってドライバーに物を売り付けている子供達がいる。ピナツボ火山の噴火で今も30万人がテントの下で暮らし、昨年台風では8千人が死亡し、対外債務は800億ドルに上るといふ。

それにもかかわらずフィリピンの人々の表情は決して暗くはない。南国の人人の特徴なのかも知れない。おおかたは非常に楽天的で善良な人々と思われる。人口の60%が20歳未満だということもあるのだろうか、町は粗末なたたずまいにもかかわらず非常に活気に満ちている。数多く見かける小さな駄菓子屋や鍛冶屋など、なつかしい昔の日本があるような気さえした。ホテルの前で客待ちしている運転手たちも、あわよくば一稼ぎという気があるにせよ奇妙に人なつ

こいのである。

ホテルの食堂で何時間も歌い続けている歌手がいた。ボーイに聞くと「多分一晚200ペソ(1000円位)だろう」とのこと。その歌手に付き添ってきた若い女性は数年前に日本で働いたことがあり、また日本に行きたいという。「日本人は学校に行けていいなあ」という一言が耳からはなれない。貧しさのために日本に来なくてもよい日が一日も早く来ることを祈りながらマニラを後にした。

#### 4. おわりに

今回の研修では体験できなかったが、電気も水道もない学校で子供たちがどのように学んでいるのかなど、田舎の様子も知りたいと思った。そういうことも含めて、日本の海外協力の様子を紹介するドキュメンタリー映画などがもっとあってもよいのではないか。もし学校などに無料で貸し出せるビデオ・ライブラリーなどあれば高国協などを通じて紹介して欲しい。

私の撮ってきたビデオは粗末なものだが、多少ともフィリピンの様子を伝えるものとして活用したいと思っている。近くて遠い東南アジアであったが、今回の研修を通してフィリピンが非常に身近な存在となった。そのような気持ちを少しでも生徒に伝えたい。

最後になりましたが、今回の研修をお世話してくださった、たくさんの方々に心より感謝申し上げます。また、我がままな私達と終始同行していただきました山本貴夫氏と寺沢英治氏、現地で案内してくれた増田氏にはとりわけお世話になりました。有難うございました。

氏 名 青 木 久 生  
所属学校 佐賀県立伊万里農林高等学校  
担当教科 農 業



## 1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

何分にも私にとって初めての海外であり、不安よりも先に日に日に期待感が増すばかりであった。しかし、いざ海外の研修となると特にフィリピンのみでなく外国に対して、日頃いかに無知な自分であるかを再認識させられ、あわててフィリピンに関するガイドブックを購入した次第である。

また、本校の国際研究部の顧問としてすでに4年目を迎えているが果たしてこの間、国際理解を自分のものとし、生徒たちにどれだけ啓蒙することができたか反省すべき点ばかりである。

私の専門は農業であるが、今回の研修は特にこれにこだわることなく、意外と批判をあびている日本の政府開発援助（ODA）であるが、実際にその援助がどのように行われているのかをこの目で直に感じ取りたいと思った。また、現地で活躍されている青年海外協力隊員の方々の活動状況と問題点など生の声を伺うことも興味深いものであった。

それからフィリピンという国に対して、私たち日本人は何かしらある種偏見の目で見ること多いようであるが、実際にフィリピンのことについて問われた場合にどの程度のことを答えられるかは疑問である。そこで、現地の人たちがどのような生活を送っているのかが私の最大の関心事であったし、自分の目にしたこと、耳にしたことを生徒たちにうまく伝えることができればと、研修前の心構えにした。

## 2. 国際協力の現場で

### (1) 参考になったこと

政府開発援助が、よく批判されているような一方的で偏った援助ばかりではないことを知った。援助の内容について無償の資金協力をしたり、今、どのような建物、機械が必要とされているか。また、それらの施設・設備を正しく有効に活用し、技術を習得するため日本への研修員派遣や青年招へい事

業など、その他にも数多く援助のための事業が実施されている点を再認識することができた。

JICAが行っている援助については、(1)研修員受け入れ、専門家派遣、機材供与、プロジェクト方式技術協力、開発調査といった技術協力事業、(2)青年海外協力隊派遣事業、(3)技術協力のための人材の養成及び確保、(4)無償資金協力事業の調査・実施促進業務、(5)開発協力事業、(6)移住事業、(7)災害緊急援助業務といったことなど、その業務内容が多岐にわたっており、途上国の要請に応じて幅広い援助・協力が展開されていることをくわしく知ることができた。

しかし、思うような援助ができていない点は、どの地区でどのような援助が要請されているか、今後、更なる調査・研究が必要であろう。

## (2) 気になったこと

研修に行く前にフィリピンの治安の悪さを耳にすることが多かった。期間中、特に被害にあったり、そのような現場に出くわすことはなかったが、諸施設にはピストルを持ったガードマンが警備しており、派遣された方々の安全性が気にかかる場所である。

また、各施設を訪問し、専門家の方々の活動状況や内容についてはある程度知ることができたが、実際の指導場面やそれに対する現地の方々の意見や感想を直に伺えるような機会があれば、より研修の成果が上がったのではないだろうか。

それから、日常的に道路での信号機が少なかったり、交通法規があつてないようなものだそうで慢性的な交通渋滞が発生しているようであった。道路の横断に際しても、横断歩道がなく車が途切れるのを見計らって急いで渡らなくてはならず、現地の方は慣れていいのかもしいないが、私にとっては危険性を感じる場所であった。

また、下水道設備も十分に整備されておらず、雨が降ればすぐに道路は冠水してしまい、台風などの大雨による被害が懸念される。

## 3. わが国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクトなどのプロジェクトについても熱心な取り組みがなされていた。セブ地方職業

訓練センターやセブ国立科学技術大学では、青年海外協力隊の方々が熱心に指導をされていた。職業訓練センターでは、自動車の板金や組み立てを学んでいた一人の青年が私に話しかけてきて、寄せ集めの材料から組み立てて完成した車を指さして誇らしそうに笑顔をみせてくれた。

社会福祉開発省マラテ婦人職業訓練所では、今は懐かしい大和撫子さながらの主婦たちが、日本から送られた足踏み式の古い型のミシンで真剣に洋服を製作していた。コンピュータミシンの日本ではきっとこのような苦労はないだろう。

フィリピン大学理数科教師訓練センターでは、日本からの援助によりそれは立派な施設が造られており、反面うらやましいと思うほどであった。ここでの一場面として、フィリピンの地方でもリーダー格の先生方が集まられて、教材の開発作業に取り組まれていた。来年からJICAはこのために外国から優秀な先生方を招へいする予定だそうだ。

その他いろいろなプロジェクトが計画・実施されているわけであるが、このことについて詳しく知る人は日本でも少ないのではないか。できればプロジェクト毎の説明・紹介用のパンフレットやビデオなどの教材を作成いただければ生徒たちにも具体的に紹介ができると思う。

#### 4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

ここ4年間で、本校の生徒も5名がアメリカの農業研修に参加をしており、以前とすれば学校現場においてもだいぶ状況が変わってきている。このような研修に参加した生徒については報告会や発表会などに積極的に参加をして研修の成果をあげている。

ただ、現時点において、国際理解の面については欧米に偏りがちな傾向があり、もっと発展途上国に目を向けるような教育指導が必要であろう。

そこで、今回の研修は私自身にとって大変役に立ったのはもちろんのこと、初めての海外であり、少々大げさであるかもしれないが私の外国観も今までと違って少し変化したような気がする。

フィリピンの実情を考えた場合、日本の生徒たちは恵まれた環境の中で教育を受けることができているが、それでも、自分の目的意識を明確に持つことのできない生徒が多いように感じる。まずは私が目にしたフィリピンの現状を、スライドを作成し機会を設けて話していきたいと思う。そして、生徒の置かれ

ている立場とフィリピンの子供たちの立場の違いを理解させ、今後、本人たちがいかにすべきかということの喚起を促すための一端を担うことができると考えている。

また、今回研修したことをもとに、他の発展途上国がおかれている現状についても、国際研究部の生徒をはじめとして調査研究を進めて、報告・発表の機会を設けて活動の輪を広げて行きたい。

## 5. 所感および意見

### (1) 研修時期および期間

研修を終えて帰国したのが8月29日で実際に帰省したのが翌日の30日であり、まもなく2学期を迎えることになり、とてもあわただしかった。夏期休業中の7月から8月上旬にかけては学校行事等も多いので、できれば8月25日頃には帰省できるように、新学期まで少しの余裕があればよいと思う。

研修期間については、行く前までは少々長いような気もしていたが、終えてみるとこの9日間は充実した研修ができ妥当な期間であったと思う。

### (2) 研修日程および訪問先

研修の日程についてはある程度余裕を持って計画されており、窮屈に感じることもしなかった。訪問先についても盛りだくさんで、それぞれの訪問先で十分なる視察研修ができたと思う。ただ、欲を言えばたとえばセブ国立科学技術大学、セブ地方職業訓練センターなど、紹介用のパンフレットなどがあり、それを見ながら説明を受ければもっとよく理解できたのではないかと思う。

また、訪問先としては農業試験場や実際に農業を営んでおられるような現場を見ることができれば、よりよかったと思う。それからスモーカー・マウンテンについてはバスの中からの見学しかできずに残念であった。

### (3) その他全般的な所感

はじめに、今回の研修において細心のお世話をいただいたJICAの関係者の方々に厚くお礼を申し上げます。

私の前をこの9日間があっという間に過ぎ去っていった。初めての海外で

あったが、時間と経済的な余裕があれば次回は充分なる下調べと言葉の勉強をして海外へ出向きたいという気持ちを起こさせてくれた研修であった。

地球的規模で平和・協力が叫ばれる現在、豊かな国と貧しい国の距離は一向に縮まろうとしない。しかし、恵まれた日本という環境からあえて離れ、途上国に対して献身的な努力をされている数多くの方々の存在をこの目で拝見し、また、今までの自分の生き方がほんの目先のことだけにとらわれているばかりで、もっともっと自分の周りに、日本のことだけでなく、広く世界に目を向けなくてはならないことに気づいたことは一番の収穫であった。

国際理解だ、国際協力だと口ではたやすく言うことができても、いざ実行に移すとなるとどれだけの覚悟と努力が必要になるだろうか。考えれば考えるほどこの言葉の意味することがわからなくなってしまう。

しかし、この研修で得た貴重な体験を更に深め今後の教育活動に生かしていくことが今後の役割の一つだと考えている。私たちはまず身近な国際理解や国際協力について、今後一日も早く取り組んでいくことが必要である。

最後に、スモーキー・マウンテンにおいて、親や兄弟とリヤカーを押しながら、ゴミの分類と回収で毎日を生きていく糧としている子供たちの目、そして、ホテルの前や渋滞する車の間をぬって新聞やタバコを一日中売り歩いている、あの子供たちの陰りのない、明るくたくましい眼差しは今でも私の胸に深く焼き付いている。

氏 名 田 村 和 之  
所属学校 山口県立防府商業高等学校  
担当教科 数 学



## 1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

初めての海外研修、初めてのフィリピンということもあり、出来るだけ多くのものを吸収することが当初の目標であった。そこで、次の2点を主眼とした。

### ① フィリピンという国の現状把握と国際協力の必要性の認識

- ・大学、中等学校、小学校等の教育事情を詳しく知るとともに、教育水準等から何が問題になっているのかを理解する。
- ・当地の生活様式や文化、歴史、食生活や気質などにも出来るだけ触れる。
- ・国として、特に何に力を入れているのかを認識する。
- ・政治・経済をはじめ各種産業の中の問題点、さらに、施設設備や教育の問題点、その他種々の問題点からいま何が必要とされているのか、今日本に何を求めているのかを探る。

### ② JICAの事業について

- ・これまでどのような活動を行ってきたのか、これからはどのような援助をしていくのか、また、現在援助をしている中で、どのようなことが問題点として起きているかということを認識する。
- ・専門家、青年海外協力隊員から活動についての生の声を聞き、意見交換をして、自分の活動を通しての日本の高校生達への提言を伺う。

## 2. 国際協力の現場で

### (1) 参考になったこと

今フィリピンの緊急課題は、経済の発展である。そのためには、天然資源、人材資源の発掘が急務とされている。その両面を効率的・効果的に援助するために、実に多種多様な事業が行われている。

ハード面だけを全面的に供与するのではなく、人的貢献、人を育てる貢献、技術を残す協力をしている。また、将来国が自分で生きていけるような、自



立てできるような協力をし、当地の人達の内面的エネルギーを喚起させ、潜在能力を引き出すようなソフト面の協力にも重点を置いている。したがって、時間はかかるだろうがこれから次第に生活環境も改善されると思う。

このような一つ一つの様々な貢献が、ゆっくりではあるが着実に積み重なって一国を支え、変えていくのだと思うと、一人一人の力の大きさに驚くとともに、国際協力の素晴らしさと必要性を再認識した。

## (2) 気になったこと

実際に現地に行ってみて、事前に認識していたイメージとのギャップを感じるとともに、専門家や青年海外協力隊員の方々からも様々な悩みを聞いた。

### ○セブ科学技術大学で

計算力が非常に弱い。暗算が出来ない。日本の高一程度の計算が出来ない。記憶力はとても優れているが、応用力がない。論理的なことに弱い。中身より見た目に拘り、手を汚して何かをやっていくということが苦手。四ヶ月で卒業だが、一年以上予約が詰まっている。

### ○ワニ養殖研究所

この協力の意味を、地元の人達にはかなり理解してもらい意識も高まってきたが、まだフィリピン全土の人達に完全に理解されているという訳でもない。キャンペーンなどの啓蒙活動を実施し、賛同を得られるように努めている。

### ○社会福祉開発省マラテ婦人職業訓練所

まだフィリピンには、女性には教育を与えなくてもよいという風潮があるので、①高い教育をうける機会がない

②自己向上の機会に恵まれていない

③仕事の技能を磨く機会に恵まれていない

④子供と仕事の二重の重荷を背負っている

⑤女性に対する偏見

等の、女性の不利な立場をなくしてこうと努力することが非常に難しい。女性は、教育を受けた人の中では平等であり女性進出も目覚ましいが、そ

うでない人との格差が激しい。

○ U P 理数科教師訓練センター

義務教育の卒業生率が低い（60％）。また、施設や学習環境が悪い。

機材の無償配布をしたが、調査の不十分さから宝の持ち腐れになっている。

理数科の教育のレベルが低く、また教師の質も低い。

3. 日本の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

今回視察した施設で行なっているプロジェクトや、その他のプロジェクトも全て紹介できればよいと考えている。日本の地方では、身近にそのような情報を得る機会がある場合は別として、各種プロジェクトはもちろん J I C A についても、漠然とは知っていても詳しく知っている人はごく少数派である。つまり、ニュースとして知っている程度である。

したがって、多くの協力をもっと広く紹介できればと思うが、その中でも幾つかに絞るならば、土壌研究開発センターと U P 理数科教師訓練センターであろう。

前者は、土壌分類をはじめコンピューター等の分析機器を導入し高度な研究を行うと同時に、試験場や農場での農作物の研究、さらに日本の人工衛星を使ったピナツボ火山の泥流予想などハイレベルな研究を行っている。

後者は、国を支えるため最も必要とされている人材育成の一端を担っている。物理の教師のなかで5%しか物理を習っていないという教育レベルの質の低さを上げるため、パッケージ協力が重要になってきている。これにより、無資格の教師や先生の卵の育成が求められている。

以上、ハード、ソフト両面からの援助が非常に大きな成果をあげていることを評価し、各方面に紹介できると思う。

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

現在私が担当しているインターアクトクラブは、その活動の二大柱の一つである国際理解については顕著なプロジェクトがある訳ではなかった。今回の研修により、国の現状と国際協力のありのままの姿を少しなりとも生徒に伝えることが出来る。写真や資料を使えば、さらに臨場感のある話が出来ると考えて

いる。また、青年海外協力隊員の生の話、説得力のある話をする事により、少しでも日本が行っている国際協力を知って欲しいし、もっと興味をもって欲しいと思う。

## 5. 所感および意見

### (1) 研修時期および期間

時期、期間ともに適当であると思う。ただ個人的には少し帰国後に余裕が欲しかったので、もう3、4日時期を早めてもよいと思う。

### (2) 研修日程および訪問先

研修日程は無理なく組んであり、隊員、専門家の活動視察だけでなく、街の雰囲気や人々の生活等の様々な面を吸収するのに役立った。

訪問先も、隊員、専門家の多岐にわたる活動のごく一部ではあるが、かなり専門的な話まで見聞きでき参考になることが多かった。ただ、パラワンでの日程が忙しく、もう一泊あればという気持ちが強いが、諸事情により無理かも知れない。また、隊員の方々の実際の授業風景、実際の活動場面、生徒や地元の人達と一緒に活動している場面等が見れたら、さらに良かったと思う。

### (3) その他全般的な所感

この研修旅行では、かなりショッキングな場面があった。東南アジア最大のスラム街といわれるトンド地区では木造の小さな家が密集し、どの家にも多くの洗濯ものが干してある。家族の多さ、子供の多さ、それに生活の苦しさが伝わってくる。道路の端には山のようなゴミが無造作に投げ捨てられていて、自動車の渋滞を引き起こしている。そして、そのゴミの中から使えそうなものを探している少女達がいる。また、スモーカーマウンテンのすぐ横には、一つの小さな街が出来、機能しているのである。思わず目を覆わずにはいられない光景であった。また、雨が降るとすぐに洪水になる道路や路地、そしてその中で元気にはしゃぎ回って遊ぶ子供達。生活苦を感じさせないこの子供達の目はいずれも生き生きしていた。信号待ちの自動車にタバコや新聞を売る少年達、サンパキータの花のレイを売る少女達、どれも鮮烈な残像

が脳裏を駆けめぐる。

研修前はかなり心配もあったのだが、帰国後は、もう少しいろいろ見て回りたかったという思いが残る研修となった。

最後になりましたが、今回の研修旅行に際していろいろとお世話していただきました高国教の皆様、JICAの皆様、旅行中大変お世話になりました山本、寺沢各氏、青年海外協力隊の皆様、専門家の方々に心から厚く御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

氏 名 多 田 哲 司  
所属学校 北海道立深川農業高等学校  
担当教科 農 業



## 1. 視察等に際して

発展途上国への訪問は初めてのことなので、まず訪問国の実状（庶民の暮らし等）を自分の目でみてみることに。青年海外協力隊隊員が実際に活動している所に訪問する機会があるので隊員の生の声を聞くこと（協力をを行う上で支障となっていること等）。訪問国での教育の現状の把握。以上の3点を今回の海外研修での主眼とした。

## 2. 国際協力の現場で見たこと考えたこと

発展途上国をさまざまな面から援助するために、各国の事情に合わせて数多くのODA事業が行われている。しかし、最近ODAのあり方に対する批判や疑問、NGOとの比較等で何かと話題に上がることが多い。

対フィリピンODA事業においても国民のためでなく一部権力者の懐を潤している、誰のためのODA？、日本企業のためのODA？などと考えたこともあったが、南の国で10日間遊んでみようという軽い気持ちで参加したのが出国前の気持ちであった。しかし、フィリピンの現状を見て、また技術協力の現場を視察し感じたことは、フィリピンの経済発展および生活向上に欠かせない教育の充実や人的資源の開発のために、物質的な援助にとどまらず数多くの専門家・協力隊員が現地の人々と共に働いていることであった。また彼・彼女らができうる最大限の協力をを行っていることを目のあたりにする中で、私の意識に何かしら変化が生じた。それは、今回の研修でお世話になったプロジェクトリーダー・個別専門家・青年海外協力隊員・フィリピンJICA事務所の皆様の常にフィリピンの発展を願う心、自分の仕事に対する誇りと情熱が私の心を動かしたのであろう。

さて、今回の視察研修で特に印象に残ったことは、人材育成に対する有形無形の援助の占める割合の多さであった。研修員受入事業・青年招聘事業・中学校建設計画・STTCでの教師訓練・教育機材整備計画等々、数多くの教育分

野での援助。JICA事務所のお世話により石田専門家によるフィリピンの農業や灌漑の現状についての貴重なお話を拝聴する機会を得ることができたこと。これらは、研修の機会が与えられずに居たなら決して知ることのできないことであったとつくづく考えるものである。

また帰国し、授業・地域での研修会等で、今回の研修の成果を報告する機会がある度にフィリピンの人々のたくましさ、現地に入り込み草の根レベルで懸命な活動を展開している協力隊員の紹介をすることにしている。トンド地区の裸坊の子供達、車の間を縫って花飾りやタバコを売り歩く小さな商人達、P S H Sに通う生徒達、早くビザを取って日本に来たいと言っていた彼女達 etc。今、フィリピンに取って一番何が必要かを教えてくださったセブ国立科学大学の田中さん、藤崎さん、職業訓練センターの上野さん、婦人職業訓練所の高麗さん、懇親会でお会いすることができた協力隊の皆さん。今回の経験は、発展途上国に対する援助のあり方を考える上で、いや今後の日本を考える上で何かを示唆してくれたような気がする。

### 3. 研修時期および期間

研修時期について、北海道の場合、2学期始業式が8月20日頃なので8月上旬、または3月下旬であるほうが、学校業務などに支障がなくありがたい。期間については、このままで良いと思う。また、フィリピン班では比較的自由時間が多く、滞在先での散策をすることができたいへん有意義であった。訪問先については、小学校および一般の高等学校・企業等を訪問することができたなら訪問国の現状をより深く把握できたのではないかと残念である。

### 4. あとがき

「フィリピンに私は打ちのめされた」、これが私の偽らざる感想である。スモーカーマウンテン、ケソン市の高級住宅街。この2極端が混沌とした国、フィリピンを象徴している。いささか毒気が強い国だが、そこに住む人たちはアティブで明るく日本人が失い欠けているものを持っていた。

国際理解とは相手のことを知り、そして考えるのではなく、相手に教えられ自分達のことを見つめ直すことではないかと今回の研修を通して思い始めた。

最後に、貴重な体験をする機会を与えてくださったJICAの皆様、研修中

色々とお世話していただいた山本氏、寺沢氏、増田氏、柏谷氏、多忙な時期にも関わらず時間を割いて貴重なお話を聞かせていただいたN I Aの石田氏、S T T Cの日浦氏そのほか大勢の関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。

氏 名 田 邊 壽 也  
所属学校 岐阜県立高山工業高等学校  
担当教科 工業（機械）



## はじめに

国際協力事業団（JICA）、県教育委員会、県高校国際教育研究会のご尽力により、フィリピンへの海外研修の機会を得た。首都マニラを中心に、JICAの援助を受けている各プロジェクト事業の視察、フィリピン在住の青年海外協力隊員、専門家の方々との懇談会等を通してフィリピンの社会、文化、教育、日常生活等の一部を勉強し、貴重な体験をすることができた。

### 1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

- (1) 日本の援助がどのようになされているか。その実態を知る。
- (2) JICAの技術協力がたずさわっている職員、専門家及び協力隊員の活動状況を認識する。
- (3) フィリピンの社会、産業、経済、文化、教育等の実情を知る。

### 2. 国際協力の現場で参考になったこと、気になったこと

#### (1) 参考になったこと

(ア) 現在フィリピン各地には専門家46名（農業開発、理数科教育職業訓練開発等）、技術協力者44名（土壌研究開発センター、ワニ養殖研究所、稲研究所等）、協力隊員85名（内女性33名、理数科教師、食品加工、陶磁器、溶接、工作機械、電子機器、自動車整備、家畜飼育、縫製、手工芸等）が派遣されている。

派遣当初は言葉、食事等で苦労したと聞いた。とにかく生活していかななくてはならない。現地の人達と仕事をしていかななくてはならない。何もかもほとんど自分一人で実行していかななくてはならない。専門家や協力隊員の事業説明や態度等を見ていると単なる外国生活への憧れや安易な気持ちでは仕事はやれないことがひしひしと伝わってきた。

(イ) マイクロバスにてスモーキーマウンテン（マニラ市内のゴミ投棄場、広



さ15万ha、ゴミの高さ25m、臭い、汚い、危ない)や各事業所へ行く途中での大人・子供の働く姿、町並み、街路、家屋、建物等を窓から眺めていると、援助とは何をどうすればよいのか、何から手を付けていけばよいのか、ただ啞然とするばかりであった。援助とは大変なことであると思った。

また、フィリピンが抱えている課題、①治安の問題②貧困の問題③失業者の問題④電力事情の問題⑤地方の開発の問題等を視察によって認識することができた。

(ウ) 専門家や協力隊員は単に専門の知識ばかりではなく、指導力、教養、趣味、個性、人格、持ち味及び強靱な体力、精神力が必要であることがわかった。

(エ) 協力隊員は命がけであることが理解できた。JICA関係者が一番神経を使い、頭を悩ましている問題は治安対策であるといわれた。共産ゲリラやカージャックのターゲットにならないように極力地方の情報をキャッチし、安全な地域を選んで実施しているとのことである。

また、自分の身は自分で守ることが重要であるといわれた。目立った服装をしない。行動を予知されない。労務関係(使用人とのトラブル等)で人の恨みをかわない。周囲に気を配る等毎日の生活の中で日本では考えられないことにまでも神経を使って仕事に取り組まなければならないことがわかった。ホテル、銀行、スーパーマーケット、商店等あらゆる所にガードマン(男性又は女性)が拳銃を腰に付けていた。常に何か起きてても不思議ではない国であることがわかった。

(オ) 国際協力では日本人の常識や価値判断で物事を処理してはならない。フィリピンにはフィリピンのシステムがある。相手国の文化、国民性等を理解し、仕事ばかりではなく、普段現地の人々との交流、心のふれあいを通じて、あせらず大きな気持ちで取り組む必要があることが協力隊員の話ぶりから推察できた。

(カ) フィリピン第二の都市セブ島にあるセブ国立科学技術大学では、自動車整備(板金・内燃機関)、電子機械(コンピュータの基礎)、建築(パースの着彩)等の授業が見学できた。

また、セブ地方職業訓練センターでは、工作機械(旋盤・ボール盤・形削り盤・フライス盤等)の設備やヤスリがけの実習をしている生徒を見る

ことができた。驚いたことには、ここでボンネットやボディー等を板金加工して、取り付けた自動車が置いてあった。非常に立派な出来栄であった。受注して作っているとのことである。塗装しないで街を走っている自動車を何台か見かけた。生徒の板金技術の高さに驚くと同時に生徒は嬉々として加工に取り組むであろう姿を想像した。

電動ミシンを使って一生懸命真剣に衣類の縫製をしている若い女性の姿も見学することができた。見ることでより理解を深めることができた。

(キ) マニラ市内にある社会福祉開発省マラテ婦人職業訓練所では、若い女性に混って年配の女性が電動ミシンを使ってぬいぐるみ等の仕事に真剣に取り組んでいた。ここで技術を身につけ、独立したり、就職したりするという。女性は努力をし、働き者であると思われる。

(ク) 昨年の6月15日ルソン島中西部に位置するピナツポ火山(1745m)が600年ぶりで大噴火した。その噴煙は西方6～700kmに流れ、火山灰が覆った地域は150km四方におよび100万人以上が田畑を失い、今尚30万人がテント生活を送っているとのことである。土壌研究開発センターでは日本からの無償供与によるコンピュータを使っての徹夜作業により、「火山灰泥流被害地予測図」を作成して、フィリピン農業省に発表したとのことである。発表は最初の泥流被害が発生する5日前であった。予測図は見事一致した。フィリピン政府に高く評価されている。

従来の予測法ではなく、土壌図を基礎とすれば、より迅速・正確に作成可能であることがわかったと話された。

(ケ) パラワン島(日本人はほとんど行っていない)のワニ養殖研究所を見学できたことはワニの勉強ができて、大きな収穫であった。この島が発展するかしないかは研究所の研究成果にかかっていると思われる。

(コ) 相次ぐ天災・人災等で経済が非常に苦しいとのことであるが、非常に活気に満ちている国であると思った。人口の60%が20歳未満の人々である。ラモス政権は叱咤激励をしており、やる気満々であるとのことである。若い世代が今後どのように活躍するかが課題であると思う。

## (2) 気になったこと

(ア) 各プロジェクトの施設・設備等の見学や専門家及び協力隊員の活躍状況

については説明でわかったが、実際の指導、活躍の場面を見る機会が少なかったのが残念であった。また、現地で働いているフィリピンの人々との懇談の場があるとよいと思った。

- (イ) 日本の援助が国の現状に合ったものだろうか。上層部と国民の要望とにずれがないだろうか。また、援助が終ったあとの施設・設備の活用状況等はどうか。
- (ウ) 日本の援助や各プロジェクトについて、大統領はテレビ、新聞等マスコミを通してPRに活躍されているとのことであるが、国民はどのように受けとめているのか。
- (エ) 各プロジェクト等で知識や技術を学んだ人々の社会での活躍状況はどうか。

### 3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

今回の学習指導要領改訂の基本方針の一つに「文化と伝統の尊重と国際理解の推進」がある。工業教育の国際化を図る場合、先生が諸外国へ行って指導したり、あるいは国内で外国人研修員を指導したりするなど、実際を通して体験することは重要である。

工業教育に携わる先生方の国際技術協力の現状や工業教育の国際交流事業を積極的に紹介すべきである。

- (1) セブ国立科学技術大学
- (2) セブ地方職業訓練センター
- (3) 社会福祉開発省婦人職業訓練所

### 4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

- (1) 来年2月に富山で行われる高国協の「東海大会」でスライド等を使用しして報告することになっている。
- (2) 本校の新聞「高工タイムス」及び「育友会報」に寄稿する。
- (3) 授業を担当しているクラスに体験を話す。
- (4) 関係機関誌に寄稿したいと思っている。

## 5. 所感および意見

### (1) 研修時期及び期間

色々な事情でこの時期に計画されたと思うが、本校は8月26日から第2学期が始まる。研修したことの整理や精神的、体力的な回復等を考えると、個人的には8月初旬が良いと思う。

研修期間は適当である。

### (2) 研修日程及び訪問先

日程にゆとりがあり、大変良かった。(よく病気したり体調を崩したりするのは、短時間にあれもこれもと無理な計画をすることに原因があると思う。)

訪問先については、良く考えられた事業先を選んでであった。特に、ワニ養殖研究所を見学できたことは良かった。

### (3) その他、全般的な所感

(ア) 我が国の国際化(国際理解、国際協力)が進む中であって、実際にその現場の視察の機会を与えていただいたことに感謝したい。体験することは効果的であり、大変重要なことである。事実多くのことを学ぶことができた。

(イ) バイタリティにあふれ、情熱を持って活躍されている専門家や協力隊員の方々の姿を拝見すると頭が下がると同時に、国際理解・協力の重要性やその難しさも認識できた。

(ウ) ホテルの宿泊はツイン部屋で一人であるが、2人でもよいと思う。他府県の先生との交流等ができる利点もある。また、経済的な負担が増すが、一流のホテルを利用してもよいと思う。精神的に落ち着くと思われる。このような考えは国際的思考でないかもしれない。

(エ) 経済的に苦しく色々な課題を抱えている国ではあるが、人々の屈託のない明るい笑顔。大雨の中、ずぶぬれになっても子供や大人がサンパギータ(フィリピンの国花で花をつないでレイにしてある)や新聞、タバコ等にビニールをかぶせて濡れないように注意しながら、車が止まる度に窓にやってきて笑顔で声をかける。物乞いの態度ではない。子供も若者もよく働いている。たくましく活気に満ちている国である。

朝夕見かける女性の服装はきちんとしており、背筋をピンとして堂々と歩いている。

センターラインのない道路（信号機は主要道路にわずかにあり）。3列4列にもなって走っている日本車の中古の小型ディーゼル車。アメリカの軍用ジープ改造車（ジープニー）。交差点での車の列。横断歩道はない。子供も大人も実に巧みに見事に横断する。このような状態でも車はスムーズに動く。これは理想の交通システムではないかと思った。

(オ) JICA及びその関係者の活躍については、毎月学校へ送られてくる月刊誌「国際協力」、「海外移住」及び個人的に購読している海文堂出版(株)（文部省職業教育編）の「産業教育」で知る程度の認識であった。

今回フィリピンの現状をほんの少し垣間見ただけではあったが、研修で得た貴重な体験を今後の教育活動に生かしていきたいと思う。

(カ) 帰国後、冷蔵庫の扉に小さいヘビの縫いぐるみが吸盤で付けてあった。何気なくラベルを見ると、セブ アニマルズ ロング1992 MADE IN PHILIPPINESと表示してあった。子供がゲームのUFOキャッチャーで取ったものであった。これは偶然だ!!……

マニラ市内にある「社会福祉開発省マラテ婦人訓練所」で真剣に仕事に取り組んでいた女性の姿が目についた。

最後になりましたが、山本貴夫氏（国際協力サービス・センター広報部広報企画課課長）には頭が下がる。各プロジェクト事業所等における通訳は英語を自由自在にあやつり、その的確さ・速さ・知識の豊富さは見事であった。事故もなく無事研修が終了でき、実りのある研修ができたことは、氏の人柄のおかげである。我々の気持ちをそれとなく気遣い、献身的とも思える態度・行動のおかげである。心から感謝申し上げます。

氏 名 藤 城 俊 郎  
所属学校 愛知県立時習館高等学校  
担当教科 理科（生物）



## 1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

高校教師海外研修派遣が決まりフィリピンについて事前調査の段階で、研修日程案にパラワン島でワニ養殖研究所視察があることを知り、またとない絶好の機会に巡りあえたことにきづいた。“パラワン島”この島の名前は、約30年前、大学時代の学友たちが、学内の有志を募りパラワン探検隊を編成し、夏休み中探検に出かけていった時に知った。彼らの帰国後その土産話に花を咲かせたこと、またその学友の一人が帰国後マラリアになり、生死の境をさまよったこと等々懐かしく思い出され、この機会にぜひフィリピンの田舎“パラワン島”にでかけ、絶滅の危機に瀕しているといわれるワニの保護活動、養殖の実態を自分の目で実際に視察することと、まだ開発が進んでいない自然を、ありのまま見てきたいということを第一に考えた。その他、近頃、熱帯雨林の破壊など環境問題が話題になっているので、機会があればその現場をみれるかも知れないということも考えた。

また、フィリピンの事を調べていて、フィリピンの工業化は他のアジア諸国と比べて1950年代の早い時期から始まっているのに、1980年代には工業化の進展が頓挫していることや、20数年前にはアセアンの優等生であった国が、現在はマレーシアなどに抜かれてしまい、かなり遅れていることを知り、この原因となるものは何なのか、その一端でも知ることができればと思い、この研修に参加した。

## 2. 国際協力の現場で

### (1) 参考になったこと

8月21日マニラ、JICA事務所で詳細な日程の説明を受けた時に、パラワン島の視察、その他はじめの日程の変更があり、この国の理数科教育についての実態を知る機会が多く盛り込まれていることがわかり、私の研修日標に参考になることが多く、身が引き締まる思いがした。

① パラワン州プエルトプリンセサ市、ワニ養殖研究所

フィリピンのクロコダイルは、過去この国の数多くの島々の水際で、様々な広い住みかたに巧みに適応して棲息していた。にもかかわらず、現在絶滅に追い込まれているのは、彼らが自然界に適所を見出しえなかったからではなかった。フィリピンの国土は日本の国土から北海道を除いた広さであり、しかも約7000の島々にわかれている、この狭い国土に約6500万人近くの人々が住んでいる。急激な人口増加によりワニの住む場所にも人々は進出し、人とワニとの共存が出来なくなり、米を作るためにワニを殺し耕地を広げてきた。この国でワニが絶滅に瀕した背景にはこのようなことがあった。

この国の野生ワニが500～1000匹と推定されている状況下でJICAプロジェクトにより1987～1992の5年間で養殖技術が確立され、本年度末には約1200匹、来年、再来年と倍々に増える事が予想されている。所期の保護目的は達成され、今後は地域経済に貢献しながら運営されることが課題になってきていることを知った。

ワニも3.5m以上になると人をエサとしか認識しないという。生物社会の構成要素として本来略奪者としての生活環境を持つ動物を養殖し保護している現場を目のあたりにして、種を絶滅させるのはいとも容易だが、人と共存し保護することは大変な事業だという実感を得たことは、生物教員である私にとって有意義な視察であった。

② フィリピン大学理数科教師訓練センター

日浦賢一氏から解説を受けたことから印象が鮮烈であったことをまとめる。

フィリピンでは中等教育開発計画の大きな柱として、ハイスクールの義務教育化、無償化などが計画されているが、小学校6年を終了する児童は全体の65.7%、ハイスクール4年終了者は、同年齢層の約50%にも満たないのが現実であり、多くの小学校は施設・設備が貧弱であり、48%の小学校には水道がなく、61%の小学校には電気がない。多くの子供は、その学年で習得しなければならない内容の55%しか理解していなく、6年生といえども小学校3～4年生の学力しかない。また、人口の増加にともない、地方の公立ハイスクールでは、教室が不足し1クラス60～70人というケー

スが出現している。公立学校では慢性的なテキストブック、教材不足に悩まされているのが実態である。こんな現状を踏まえ、台風に耐えられる校舎の建設、教室不足の解消をめざし援助活動が実行されているとのことであった。フィリピンの中高等教育現場の実情と、その改善に協力する日本からの有効な援助が実行されていることを知り、認識を新たにした。

その他、理科教育に携わる者として、“本当なのか！”と驚いたことがあった。それは「教師の質の問題」である。例えば、ハイスクールで物理を教える教師のうち、大学で物理を専攻したものは、全体のたった5%にしか過ぎないこと、化学・生物の場合は20～50%であり物理よりも良いにしても、この国では資格の無い教師が理数科を教えているのが現状であることを知った。

日本では理科実験に電気・水を使用することを日常的に行っているが、この国に日本をそのまま持ち込むと、乾季の電気・水不足により使うに使用せず、またその扱い方も知らない教師群では、ザルに水・ネコに小判の例えになってしまうと思った。これらの教育事情改善のため、フィリピン大学理数科教師訓練センターが設立され、現職教師訓練に必要な研修プログラムの計画・実施・評価に関する技術協力、指導助言を行う活動が最近始まったばかりとのことであった。

この国の理科教育の実態が理解されるにつれて、この国に来るまえの調査時に抱いた疑問「何故工業化が進まないのだろう！」についての答えの一端が見つかった気がした。

## (2) 気になったこと

ワニ養殖の現場では、所期目的の保護活動は達成されそうであるが、このプロジェクトの目的の一つになっている、地域社会に貢献し、貧富の格差解消をはかる件については、現地の人々にも関心があり、見学者が多くあると聞いた。しかし、この技術を現地に広め、事業化するには多額の資金が必要である。そのため富める者のみが手を付けることが予想され、貧富の格差解消に結びつけることは大変なことだと感じた。

理数科教育については、現在教師の再教育についての器が完成したばかりで、今後教師の再教育をマニラ首都圏だけでなく、全国的に波及することが計画されている。しかし、この国の教育に配分される予算が、他のアジア諸



国の平均を大きく下回っている事実などがわかるにつれ、前途多難なことだと思った。

### 3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

フィリピンで実施されている数多くの日本の協力、プロジェクトのうち、今回視察したのは、ほんの一部だけであったが、どの現場も熱心に取り組まれていた。私が一番興味があり、その地道な研究活動・協力活動を紹介したいのは、パラワン島のワニ養殖研究所である。村田隆一プロジェクト・リーダーを中心として国際的に絶滅の危機に瀕していて、このままではわずかな剥製が液浸の標本でしか見られないという、悲しい日を待つばかりであった、フィリピンの素晴らしい動物・クロコダイル。その保護・繁殖という所期の目標のめどがつき、今後は、増殖したワニを利用して地域経済の活性化に役立てることと、その結果得た利益により、ワニの保護活動を維持、継続することなど、ますます充実した協力活動が展開されることと思う。

その他、理科の教員としてはフィリピン大学理数科教師訓練センターの協力事業も、日本の各方面で紹介したいものの一つである。

### 4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

開発途上国、フィリピンの大都市や、まだ豊かな大自然が残っている田舎で現地の人々に溶け込み日常の生活改善、経済活動、教育活動等多方面にわたり行われている協力活動をぜひ日本の教職員、生徒に紹介したいと考えている。

国際教育、国際協力というと、今までは視点がどうしても欧米に向く傾向があったのだが、今回の視察、研修で得たことをふまえ、途上国、特に近隣のアジア諸国にもっと目をむけるような教育実践をしたいと思っている。

JICAの活動、ODAの意義、専門家並びに青年海外協力隊員の活動実態について、日本の教職員、生徒が知る機会はまだまだ少ない。愛知県高等学校国際教育研究協議会の研究会、並びに機関紙に、今回の視察で得た貴重な体験などをぜひ紹介したいと予定している。また、教科(生物)の授業では、生態系で取り扱う熱帯地方についての項目を、従来に増して内容の充実したものになりたいと考えている。

## 5. 所感および意見

### (1) 研修時期および期間

研修期間は各学校によって都合があろうが、私にとってはちょうど良かった。

### (2) 研修日程および訪問先

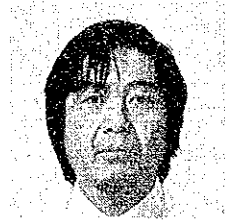
日程に余裕があり、大変良かった。時間に追われずゆっくり視察研修できた。欲を言えば、パラワンでの日程を1日増やして欲しかった。

単なるプロジェクト、施設訪問だけでなくフィリピンの風土、教育、日常生活に触れることができ、有意義な研修であった。

### (3) その他全般的な所感

国際教育、国際理解、国際協力が重要視されているさなか、協力活動の現場を視察・研修できる機会を与えていただき、大変貴重な研修が出来た。日本を離れ相手国に対して献身的に努力されている、専門家、協力隊員の姿に接し、頭の下がる思いがした。一方国際協力の重要性、その難しさもうかがい知ることが出来た。研修で得た貴重な経験をさらに深め、今後の教育活動に生かしていきたいと思っている。

氏 名 永 田 栄 一  
所属学校 長野県立須坂園芸高等学校  
担当教科 農 業



旅は総て「危険な旅」なのかもしれない。今回のフィリピン研修では時にそう感じた。もっとも最初の説明会でのホールドアップの事例やマラリア・エイズ等の説明のせいもあるのだが、危険だからこそ、行ってみなければ分からない。「そのために行く」ということを忘れてところだった。「何が危険か」と考えると、「何かをしようとする自分が危険」という気がする。マラテ婦人職業訓練所の青年海外協力隊の女性の話の中で、「我々は本当に生活の中で役立つことを教えたいと思うのですが、上の方からはハイレベルなことをやってくれといわれる」ということを聞いた。フィリピンの婦人のことを考えて行動すると自分の立場が危くなるという現実、今回の視察の中での大きなポイントだったと思う。

食糧援助でもいわれているが、食糧を与えてしまえば、畑を耕して作物を育てる気持がなくなり、援助にたよってしまう。かといって、目の前の飢餓で死にそうな人を見捨てられないというジレンマ、また二人の飢餓で死にそうな人がいても、一人分の食糧しかなければ、他の一人を見捨てることによる、「自分自身の中の精神的葛藤」、そして一人を見捨てることに対する社会的批難。「善意を持たなければ、本当は何もしないことが一番安全」なのかもしれないのだが、なぜか「人の為、人の国の為」に危険の中に行くのが、青年海外協力隊という感じがした。そして危険とはいいながらも、つながりを持ち、仕事を推進するためには、自分から動くことが必要であり、カウンターパートの人々や隊員の属する組織の人々も、受け入れることによる不安や危険を共有することによって、共に困難を解決しているのが現実という感じがした。更に「自分をさらけ出して、相手に評価してもらおう」ことによる危険さと人間関係作りの迫力は協力隊OBで今回の研修に参加した高田先生から教わったが、「求め、選び、行動する」がゆえに、自分の立場が苦しくなる、だからやりがいがあり、共に生長して行く世界は、青年海外協力隊のようなボランティア活動も我々教育者（共育者）も同じかもしれない。

小生の教え子がフィリピン女性と相思相愛になり、県の農業試験場の公務員を辞めて夜の世界で生きたいと言い出した時、「お前は騙されている。相手は日本

国籍が欲しいだけだ」と思ったのだが、相手の女性に会って、小生の「思い」の好い加減さを知ったのが昨日のように思い出された。そして彼は結局、日本から逃れてフィリピンのどこかで暮していると思うと、感慨無量だった。「思い」を考えてみると、言葉が通じないというのも不安だが、言葉が通じないがゆえに、思いやりが生まれ、相手を理解しようとする気持ちが持てるように思う。国が違い言葉が違うからこそ思いやりが生まれるとすれば、男女の違いが加わればさぞかしお互いに思いやりが持てるだろうと思うのだが、日本でのフィリピン女性に対する現実はかなり異なる。今回の研修で、夜の街に出てみたり、日本に関わるフィリピン女性や日本人との間に生まれた子供達を守る運動をしている日本人女性ら（単独行動）の話の聞くと、フィリピン女性は、よく働き、よく学び、真面目で騙されやすいとのことだ。昔の日本、小生の母親などもそうだが、よく働き、よく気がつく、そして低学歴であり、なぜか日本の昔と同じような気がしてならない。国力とか国の財産は、農村の思いやりや尊敬する心を持った力強い女性達であり、現実にはジャバユキさん達の家族思いの上にフィリピン経済の一部が成り立っているともいえる。それにしても、言葉が通じなければ多少の思いやりが生まれるはずが、多くの日本人は金（経済）という言葉で通じあう世界に安住し、また通じるという安心感からか、ついよけいなことをしたり、いってしまう。私を含めて、日本人、特に教員のおしつけがましい日常とフィリピンの現実とのギャップを感じた。育つのを待つ気持ちが大切ではないだろうか。我々は知識として教えなければいけないという日常の中で、フィリピンの社会の現実を止めて、望ましい答えを確保し、先入観を強く持っているがゆえに、思わぬ発想や発展・発見の可能性を見失っている気がしてならない。「世界では、何んでもありがルール」だといった前述の高田先生の言葉が印象的だった。日本では感じられない、日常の喜びや不思議を感じるということは、「相手を知ることは、自分を知ること」、「知識という目で見ると日常は止まっている、自ら動くことによって、総てが動いて見える」ものかもしれない。

さて視察先の感想を少し述べると、スモーキーマウンテンのゴミの山、そしてそこに生活する人々については「アッ、ソ」、それぞれ生きている現実とルールがあるんだろうな、何かをしてやろうなんて思わないほうがよいだろうと感じた。生活力こそ人間の原点と思う小生にとって、尊敬する人々でもある。

セブ国立科学技術大学では制服等があり、管理的な話の割には生徒は自由で、

にこやかであり、協力隊員の皆さんものびのびと仕事をしているように見えた。

ワニ養殖研究所は今回の研修で一番勉強になった場所だった。まずワニの養殖という発想、保護と経済と生理生態の研究と技術援助などの多目的プロジェクトでありながら、観光にもなるのだから、よく考えたと思う。特に印象深かったのは、ワニが非常にメンタルな動物で、自信を失い、ストレス状態ではアノレキシア（拒食症）になるというのは驚きだった。野生のワニを捕えた後などは、生き残らす為に、口の中に餌を入れてやったり、暗くしてミュージックをかけたり、溺死（ワニが溺れる）しないように注意するなどの外、死肉を食べるワニを日本の不用肉の処理に使ったらどうかなどの発想なども興味深かった。またどんな動物も自信を失うと生きて行けないという現実には生命の不思議さを感じた。9人も人を食べたといわれるワニと対面したが、10m近いワニの前では、自分がただの餌でしかない現実と、野生の前では人も食べられるのがあたり前という「なんでもあり」のルールを思わされた。そして、ミンダナオ島では雨期と乾期がなかったが、森林開発によって2～3年前から始まったという事実から、人間が自然環境に及ぼす影響の大きさ、ワニからは、ほんの少し野生としての人間のあり方を教わったような気がした。

フィリピン大学理数科教師訓練センターでは、自分自身が生物工学の研究者でもあるため、生物の授業方法に興味を持った。自分も一度こういう所で仕事してみたいという気持と、実際の学校で生かされる教材・教案作りで何ができると考えさせられた。科学高等学校は、卒論を書くなど自分の学校と同じような所があるが、エリート教育にける意欲はともかく、施設としては、日本の農業高校と比較にならないほど低いレベルと思った。フィリピン全国からエリートを集めた母集団であり、教育方法もすばらしいと感じた割に、教えている内容は日本の小・中学校レベルの数学や理科である所が、学校の話とのギャップを感じた。日本の中学校の教育程度はフィリピン大学の学生より上との話を聞くにつけ、「教育は総ての原動力」という感を強くした。

土壌開発センターでは、「日本の常識は世界の非常識」であり、外国では国旗に敬意を表さないと命が危いという話が印象的だった。もっとも思いやりと尊敬が相互理解の原則であることを思えば、あたりまえともいえる。ピナツボ火山の時は、「職員が10日間徹夜で、無給で働いた」という話を聞くにつけ、アジアの人々のボランティア精神を思った。ボランティアはできる人ができる所から始め

ることに意義があり、フィリピン農業が、表土流失などで失う大地を守り、農民肥料を買えない結果、結局食糧を輸入している悪循環を断ち切る低肥栽培など、多くの意欲ある挑戦を知った。農業は目立たないが、安心して住める国、自分の国や大地に誇りを持つための大切な産業であり、まさに地に足をつけた援助であると思った。

氏 名 丸 尾 直 彦  
所属学校 大分県立佐伯鶴城高等学校  
担当教科 英 語



成田へ帰国の途上、私は「ワンダーランド・フィリピン」を心に強く感じていた。今まで何度か海外渡航を経験してきたが、この時点で再び訪れてみたいという気にさせられたのは、今回が初めてである。この研修は短期間ではあったが、今後のフィリピンの持つ潜在能力の発揮を予期することを理解するのに十分な時間であった。とにかく若い国である。各所で、若者が黙々と労働に、学習に取り組む姿が見受けられた。また、どこでも目が合えば、必ずはちきれんばかりの笑顔が返ってくる。赤字債務国で、いろいろな面で苦しいはずなのに、あの明るさはどこからやってくるのであろうか。目と目で通じ合うという、この呼吸が、ここフィリピンには脈々と生き続けているのである。宿泊先の従業員のみならず、かの有名なイエロー・タクシーの運転手までが色々な身の上話をしてくれた。更には、銀行・ホテル・デパート等の入口で銃を手にしたガードマンまでがそうであった。この人達の目を見ていると、何故か不思議な気持ちにさせられてくるのである。

さて、ODA（政府開発援助）の運用面であるが、各施設において、程度の差こそあれ、実に計画的になされていた。有効に機能する段階まで来ているのも、我が国からのプロジェクト・リーダー、専門家、協力隊員の仕事にかける情熱の賜である。いかに、この国を健全に発展させていくことができるかを、常に現地の人々の立場で追究し、実践していく姿がそこにはあった。

ここで、2点挙げてみる。

- (1) ワニ養殖センター：今後、ワニ養殖を民間へと拡大することで、地域社会への貢献を考えている。国民へは、キャンペーンの実施、新聞掲載等を通じて、このプログラムの主旨・目的を説明している。この草の根レベルの活動で、人々が徐々に理解を示すようになってきている。
- (2) フィリピン大学理数科教師訓練センター（STTC）：プロジェクト・リーダーの日浦先生からフィリピンの抱える教育問題についての詳細な説明を受けた。近年、基礎（初等）教育の重要性が認識されるようになった。そのた

めの、関連プログラム（例：耐台風校舎建設プログラム）の成否が、今後のフィリピンの行く末を大きく左右することになる。同時に、スモーカー・マウンテンの悲惨な状況がオーバーラップしてきた。「国際協力は不可能への挑戦」という。日浦先生の言葉が印象的であった。

最近、ODAの使い方については、色々な指摘がされている。贈与の割合の低さ、対GNP比の低さ、一部権力者優先、日本企業の利益優先等——。しかし、実際に協力現場を視察して回り、我が国の代表がフィリピンの将来の自立を目指して地道な努力を続けているのは、先述のように否定できない事実である。

次に私が注目していた環境問題の面であるが、スモーカー・マウンテンの特に悲惨な現状を筆頭にして、日本でも見受けられるような問題に至るまで、数えあげればきりが無い。最終的には人間の健康につながる面の持続的な改善が必要であろう。それには、先述の基礎教育の充実が条件となる。水の浄化方法、手洗いの励行、ごみの処理方法、寄生虫の駆除等が挙げられる。幸いにも、社会福祉開発省婦人局が活動の一環として、3500人程のソーシャル・ワーカーを各地に配置しているのは、特筆に値すると思われる。特に、ごみ処理については、リサイクルとの関連で早急の対策が求められるであろう。日本でも夢の島はほぼ満杯状態となっている。個人の利潤追求のみが続く限り、解決しない問題であり、政府・自治体の真剣な取り組みに期待したい。また交通面においても、少し雨が降っただけで道路が川同然となる、ほとんど自転車を利用されていない、ラッシュ時の交通渋滞のひどさ等が挙げられる。車のほとんどが日本車というのも気になった。このように環境改善の余地は多方面に及んでいる。日本でもマスコミを通じて環境保全への取り組みが連日のように、政府・自治体・NGOより叫ばれているが、やや理論のみが先行している感がある。地球レベルでの地に足のついた取り組みが今後期待される。一例として、日本企業による諸外国への公害輸出の問題も市民レベルに立った、きめ細かな対応が要求される。このようにフィリピンを見ることで、日本を見直す機会が持てたのは有難い。

この研修で学んだことは、今月末、文化祭のクラブ展示や県国際理解教育研究協議会による研修会の中で、生徒に伝えていきたい。また生徒には、色々な形で「世界」を見せていくことが大切であろう。グローバルな視野から物事を見つめ、寛容の精神を持って誠実に人々と接することができるようになると思える。同時に、この国際理解教育の重要性を、生徒のみならず、教員をはじめとする地域の



人々にも伝えていきたい。開発途上国と聞いただけで、まだ顔をしかめる人も多  
多見られる現状を打破していきたいと思う。そして今後、国際協力に携わる人間  
が1人でも多く育つことを願ってやまない。このフィリピンについても、治安の  
悪さ等、何かと悪いイメージを持たれ易い国であるが、とにかく実際に足を踏み  
入れられることをすすめる。大雨の中で、ずぶ濡れになりながらも満面に笑みを  
たたえ、花・雑誌などを売り歩くストリート・チルドレンの姿が不思議と目の前  
に浮かんできた。別れのバスに、再会を誓いつつ、いつまでも手を振り続けたタ  
クシー運転手マール、ホテル従業員ジュン、デニス達の笑顔も浮かんできた。彼  
らに幸多かれと祈りつつペンを置くことにする。

最後に、この貴重な機会を与えていただいたJICAの皆様、同行いただいた  
山本氏、寺沢氏また滞在中、色々とお世話していただいた増田氏をはじめとする  
関係者の皆様には厚くお礼を申し上げます。有難うございました。

## (2) マレーシア・シンガポール班日程

年月日	日 程		宿泊（ホテル名等）
	午 前	午 後	
08.21(金)	12:45 東京発	21:50 クアラ・ルンプール着	エクアトリアルホテル
08.22(土)	09:30 ホテルにおいて日程等説明	12:50 クアラ・ルンプール発 16:25 コタキナバル着 19:00 協力隊員との懇談会	シャングリラホテル
08.23(日)	09:00 ピサ島見学	15:00 ホテル着	同 上
08.24(月)	08:00 サバ州造林技術開発訓練プロジェクト視察	コタキナバル市内見学 17:30 コタキナバル発 21:10 クアラ・ルンプール着	エクアトリアルホテル
08.25(火)	09:00 マレーシア農科大学バイオ・テクノロジー学科拡充プロジェクト視察	クアラ・ルンプール市内見学	同 上
08.26(水)	09:00 タンピンの協力隊員活動視察	マラッカ市内見学	同 上
08.27(木)		12:15 クアラ・ルンプール発 13:05 シンガポール着 19:00 青年招聘帰国青年との懇談会	オーチャードホテル
08.28(金)	09:30 JICA事務所訪問及びブリーフィング 11:00 日・シAI(人工知能)センタープロジェクト視察	14:00 市内見学 23:00 シンガポール発	同 上
08.29(土)	06:45 東京着		

氏 名 木 下 賢 三  
所属学校 愛媛県立中山高等学校  
担当教科 社 会



## 1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

### (1) JICAの現地での活動状況の把握

JICAの人的・物的支援が、開発途上国においてどのように生かされているかを理解する。

### (2) 現地（マレーシア・シンガポール）での庶民の生活状況の把握

開発途上国の人々の生活状況を、我が身で直に感覚的に理解する。

## 2. 国際協力の現場で

### (1) 参考になったこと

サバ州で、結果を得るには10年～20年を要する植林事業に、根気強く取り組んでおられる専門員の方々の熱意を身近に見聞でき大変勉強になりました。

マレーシア農科大学バイオテクノロジー学科拡充プロジェクト視察では、国際協力事業団からの機器援助で日本の地方大学を上回る設備が整い、国の最先端の技術開発が行われていたこと、また人的にも日本人教授やコンサルタントの貢献の大きさ等、日本の開発途上国に対する援助の実を肌で感じました。

麻薬青少年の厚生施設視察では、日本人専門員の方が自動車の修理技術を指導されていました。収容されている青少年の日付きは鋭く、そのような環境下での指導に敬服しました。

シンガポールの日・シ人工知能センタープロジェクト視察では、日本で開発された技術が現地の技術者に習得・実用化されていました。日本の技術水準の高さと、その技術が人々の福祉向上のために供与されていることに感心しました。

### (2) 気になったこと

サバ州での植林事業では、ユーカリが植林されました。成長が速く植林に適しているとのことでしたが、その用途は限られているようでした。サバ州

の経済に貢献するためにも、輸出に適した樹木の植林も必要ではないのかなと感じました。

3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

- 開発途上国の青年を日本に留学させて、人材養成に貢献していること。
- 5000人に及ぶ人々が開発途上国で活動して、地方の人々の生活向上に努力していること。
- 長期間にわたる系統的で根気強い植林プロジェクト等を実施していること。

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

- (1) サバ州から日本へ木材輸出が行われ、日本の木材需要を賄っていること。また、伐採された山には日本の協力で植林が行われ、若い木が育っていること。
- (2) ODAについて、頂いた資料やマレーシア等で撮影したスライドを使用する。
- (3) 開発途上国における日本企業の活動について。
- (4) 多民族国家マレーシアでの、各民族の生活様式と生活状況。

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

時期は、研修をゆとりをもって振り返る時間を得るために、8月初旬出発が良いと思います。

期間は、適当と思います。

(2) 研修日程および訪問先

日程は、ゆとりがあり適当と思います。

訪問先は、サバ州訪問が大変良かったと思います。希望を言えばサンダカンに行くことができれば、よりボルネオを理解できたのではないかと思います。

(3) その他全般的な所感

サバ州では、新しいものと古いものが混在している町にロマンを感じると共に、青年海外協力隊の方々が、2年間を現地の人々の為にボランティア精

神で頑張る気持ちに共鳴するものがありました。

半島マレーシアでは、博物館的なマラッカの町、町中で見掛けたインド人(?)の清掃風景、ホテルと商店との商品価格の差、英語を喋る人々、プミプトラ政策など、感激やショックを受けることが多々ありました。

また、シンガポールとマレーシアの所得の差、生活様式の違いにも驚きました。

この研修で得たものを生徒のために役立たせたいと思います。

研修中は、JICAの方々に親切にして頂き、有り難うございました。

氏 名 野 津 明 美  
所属学校 鳥根県立江津工業高等学校  
担当教科 英 語



## 1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

- ① テレビや新聞等で取り上げられる日本の国際協力に関する話題は、概して批判的なものが多い。「日本は金は出すが、人は出さない」と言われ、多くの日本人がそのように感じてきたと思う。従ってこの研修旅行では、国際協力事業団の行なっている開発途上国援助のうち、人材派遣の分野がどのような成果をあげているのか、この目で確かめたかった。
- ② 私の担当教科は英語であるが、最近教科書では欧米ばかりでなく、アジア・アフリカ諸国の話題がかなり取り上げられている。自分自身、これまでどちらかと言えば欧米の文化に興味があり、アジアやアフリカを題材とした課では本文の内容を深めることができなかった。従ってこの機会に、マレーシアやシンガポールに関する様々な情報（衣食住における日常の暮らしなど）をできるだけ集め、授業に役立てたいと考えた。

## 2. 国際協力の現場で感じたこと

- ① 特に感銘を受けたのは、専門家や協力隊員の方々の仕事ぶりである。サバ州における造林技術開発訓練プロジェクトでは、育苗から造林、森林管理に至るまで、気の遠くなるような作業を目の当たりにして、スタッフの皆さんの努力に本当に頭の下がる思いだった。このような人的な国際貢献の実態を、私達はもっと知るべきである。
- ② 国際協力事業団の行なっている援助が、現地での人材養成に力を入れようとしたものであることがよく理解できた。高度な設備や技術を導入しても、それを使いこなす人材を育てなければ数年後には無駄になってしまう。相手国の風土や文化、国民性を考慮しながら、根気よく指導を続けることが必要であろう。
- ③ わが国の援助も功を奏して、マレーシアの社会経済が順調に発展していることは喜ばしい限りである。しかしかつての日本のように、経済成長を急ぐ

あまり公害問題が軽視されているように感じられる。今後産業分野での技術支援だけでなく、一層深刻化するであろう公害問題において、その防止のためのプロジェクトを両国で進めていけないものであろうか。森の都、クアラ Lumpur をほんの10分歩いていて目や咽が痛くなったのには、大変残念な思いがした。

マレーシアに限らず、公害や災害防止に関する日本の科学技術の輸出を、今後ぜひ考えてもらいたいと思う。

### 3. 今後の教育指導において考えていること

- ① 現在私が勤務しているのは工業高校である。従って、生徒達が学んでいる知識や技術は、途上国援助において役立つことが可能なものも多いと思う。私が実際お会いした協力隊員の皆さんの話を授業等で紹介し、一人でも多くの生徒に興味をもってもらいたい。(英語の教科書にも協力隊員を題材としたものがある)また、今後学園祭や国際教育研究協議会の大会において、フィルム上映会など計画してみたい。
- ② 英語という教科の目標には異文化理解がある。しかし同じアジアの国でありながら、私自身、マレーシアやシンガポールについてあまりに無知であった。両国の話題も教科書でこれまで何回か取り上げてきたが、おそらく生徒の関心を引くようなことは何も言うてはいないと思う。まずはこの旅行で集めた日常生活に関するおもしろい話題をクイズにしたり、人気歌手のミュージック・テープを聞かせたりして、本文の内容以外のことを紹介していきたい。また国際化が叫ばれている日本にとっては、両国ともお手本となる存在である。彼らと比較して私達に欠けているものが何か、生徒にぜひ考えさせたい。

### 4. 所感および意見

- ① 研修の時期はできれば8月上旬が良いと思う。2学期は学校行事も多く、帰国後が大変である。
- ② 今回は学校訪問がなくて非常に残念だった。またできれば協力隊員の活動現場をもう一ヵ所ほど視察したかった。
- ③ 視察とは別に観光地の案内もしていただいで、楽しい充実した旅行となっ

た。たくさんの人にお世話になったが、本当に感謝している。



氏 名 寒河江 松 夫  
所属学校 山形県立寒河江高等学校  
担当教科 英 語



この度、国際協力事業団の企画による上記海外研修の一員としてマレーシア・シンガポール両国に派遣の栄を賜り、その開発状況を目のあたりにすることができましたことに対し、先ずもって心から感謝申し上げます。

観光を目的とした旅行と異なり、貴事業団を通しての開発援助計画の現場を直接に訪問し見聞いたしたことは、国際教育の視野を大きく広げる意味において実に得難い体験であったと、今更ながら思っているところであります。有難うございました。

さて、この旅において、特に確認すべく意を用いたのは、イギリス旧植民地支配の影響下における両国の開発状況、及び貴事業団を通じた日本による開発援助の実態という2点でありました。

前者については、経済面における影響が特に大きいように思われ、それがほぼあらゆる面において見られるように感じてきたところであります。

基幹産業たる農業においても、土壌や気候等、困難な限定要因があるにせよ、プランテーション型営農の方式が大勢を占め、そこにあっては作付品目もゴムやパームやし等の数種に限定されてしまうということ、そしてそれは病虫害の発生、科学技術の進展等により一瞬にして市場競争力を失いかねない構造になっている点などに上記の影響を強く見る思いでした。また鉄道、道路、港湾、その他の二次加工関連のインフラ整備も立ち遅れ気味で、相当程度植民地時代のものを承けて使用しているなど、地場産業育成という視点がほとんどなかったのではないかとかがわれ、その点でもまた強い影響を感じてきたところであります。

反面、両国とも一時の不安定さを克服し、独立以来多民族の国家を維持、発展させてきたことについては、イギリス譲りのバランスを重視する態度が与かって力が大きかったとも察せられ、かつまた公用語としての英語を持つに至ったことについては、両国の内外における活動に量り知れない恩恵を与えていることも事実であり、功罪あわせて考えてみるに、大英帝国の支配の大きさというものを、その総督府の建物の壮麗さとともに、いささかながら実感できたように思われま

した。

さてこうした状況の中、日本も様々な側面から盛り立てるべく援助を続けてきた訳ですが、この度は貴事業団に関わる現場をいくつか間近に見させていただきました。廃棄ゴム園、荒廃雨林の再開発にかけるサバ州造林技術計画、マレーシア農科大学におけるバイオテクノロジー学科拡充計画、タンピン市麻薬患者更生施設の入所者技術指導、シンガポールにおける日・シンコンピューター利用人工知能センター計画のいずれをとっても、両国の存立と発展にとり決して欠くべからざるプロジェクトであり、これらはまさに極めて時宜を得た援助計画であると思われたものでありました。

どの計画も、あまたの困難を克服しつつ綿密に、誠実に、かつ整然と実施されていることに一驚し、非常に感動してきたところであります。

特にマレーシア農科大に於る学部長自らの「バイオテクノロジーによる農業の改善、振興が国家の基盤になり得る」という言葉、日本人専門家による「『種の多様性』という熱帯の立地を利した営農には大きな未来がある」という言葉等々、大変印象に残っております。ただひとつ惜しむらくは、これ程の援助の立派な実践が、その意義と成果に比して、国内外を問わず人に知られるところが少ないのではないかとと思われることであります。私自身もこの度の機会を得て初めて上記のような状況を知ったことも多く、この面での貴事業団による一層の広報活動を、現場でまた事務所で働く人々のためにも期待する次第であります。

さて、この度の体験を広く教育指導の中に生かす方策としては、私自身による写真、スライドを交えた直接の講義活動、また研修録を県高校国際教育研究協議会の総会にて発表し、かつそれを機関誌に掲載することを主として考えております。尚、それを県下の全校に配布予定です。先に担任のクラスに対し実施しましたところ、深い興味をいただいた様子で、事後の質問会も活発なものとなりました。

研修時期、期間、日程、訪問先等については、現在のものでは適当かと存じます。ただ一点申すとすれば、シンガポールでありました地元教師との懇談会をマレーシア国にても開催下されば、なお充実するのではないかとと思われます。

最後になりましたが、この度の研修の実施に関わり、ご尽力下さいました事業団本部、各事業所の皆様方、また現地にて親身なお世話を旅行中いただきました東北支部の中野様、サービス・センターの小田切様に対し、心から感謝申し上げ報告の結びといたします。本当に若い国の、そしてそれを援助する日本の専門家

の、青年海外協力隊員の息吹を感じてきた旅でした。

大変に有難うございました。

氏 名 石 田 一 成  
所属学校 青森県立三戸高等学校  
担当教科 社会（政治・経済）



### 1. はじめに

今回の研修に参加させて頂き、誠にありがとうございました。現地の視察をさせて頂き、感謝しております。特に、マレーシア、シンガポール両現地での JICA 職員の温かなおもてなしに感謝しております。今回の研修でさらに開発教育の推進の必要性を強く感じました。これからの学習活動に生かしていきたいと思えます。

### 2. 視察等に際して特に主眼をおいた点

社会科の授業で、特に日本の ODA について授業をしているので、その実際を視察したいと思っていた。したがって、サバ州の造林計画やマレーシア農業大学等の現場をみることができ、参考になった。

### 3. 我が国の協力ぶりを各方面で紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

ODA の中でも、どうしても大型プロジェクトを紹介しがちであるが、青年海外協力隊などの地道な活動についてもっと国民に紹介したほうが、国民の合意を得ることができるのではないかと思う。特に、国民は日本の国際的地位の変化や役割についての認識がまだ薄いと思うので、日本が物的な援助をしているだけでなく、地道な分野でも人的派遣をしているということをもっと広報してもいいのではないかと思う。

### 4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

- (1) 青高国協主催の夏期研修会「留学生とのつどい」でスライドとプリントを使いながら、発表する予定である。
- (2) 授業において、ODA を取り上げる際に、具体的な事例として取り上げる予定である。

## 5. 所感および意見

### (1) 研修時期および期間

実施時期については、大体今のままでよいと思うが、青森県から参加する場合は2学期が始まっているので、もう数日早ければ、なお良い。

### (2) 研修日程および訪問先

今回の場合は特別かもしれないが、移動日がやや多いのではないかと思う。また、学校の教師なので、一箇所でもいいので学校視察を入れて頂ければありがたい。

### (3) その他全般的な所感

研修全体としては、素晴らしい研修であったと思う。とくに、JICAの海外での活躍ぶりを拝見することができ、感謝している。これからの教育活動に今回の研修を生かしていきたいと思っている。

氏 名 田 畑 正 村  
所属学校 石川県立七尾農業高等学校  
担当教科 農 業



このたび J I C A 国際協力事業団の高校教師海外派遣研修のマレーシア・シンガポール班の一員として唯一人農業の教師として参加させていただきました。

8月20日に東京の J I C A 事務所で事前打合せを行い、「地球の明日を見つめて」という J I C A の紹介ビデオを見た後、日本の O D A 及び J I C A 事業の概要の説明を受けました。その中で、我が国が人道的、道義的考慮と相互依存の認識に立って開発途上国に援助を行っていて、物質的な援助のみならず、人材の養成を基本にしているということが強調されていました。

#### 8月21日

成田空港を出発し約9時間をかけてクアラ・ルンプールに到着しました。今回の訪問の目的は東南アジアにおける日本企業の熱帯雨林の乱伐、産業廃棄物の不法投棄等の悪行三昧を現地の人々の生の声で聞くことでしたが、意外にもテレビ、新聞等で報道されているような事実を見聞きすることはできませんでした。

最初にボルネオ島にあるサバ州造林技術開発訓練プロジェクトを視察しました。サバ州は近年まで我が国に対する南洋材の重要な供給地で州財政の過半を木材輸出とその関連産業に依存していたが、商業的伐採や大規模農園造成、過度の焼き畑移動耕作などにより、森林資源が急速に減少劣化し、特にラワン材は1haに5、6本しか白生しない上、生長に100年近くも要するという事で、ラワン材伐採後は長期間荒地として放置されることになりました。同様の事態が台湾、フィリピン、インドネシアなどでも発生しました。州政府は1976年に SAFODA サバ州林業開発公社を設立し、農業放棄地や伐採跡地などを対象にアカシアマンギューム等の早成樹種の造林を進めましたが、さらに事業の推進のため我が国に技術協力を要請してきました。そこで、林野庁から技術者を長期に派遣し造林技術の開発と技術者の養成等をおこなっていました。単に資金、資材を援助するだけでなく、技術者を派遣し、造林マニュアル等を作成し現地人カウンターパートに技術を伝授し、日本人技術者の帰国後もプロジェクトが継続できるように配慮され

ていました。

### 8月25日

半島マレーシアに戻り、マレーシア農科大学バイオテクノロジー学科拡充プロジェクトの視察をおこなった。日本から客員教授として某食品会社の研究所員が招かれて植物から抽出した食品用着色料の研究などをおこなっていました。マレーシアにとって農業はもっとも重要な産業であって、農科大学で学ぶ学生の双肩に国の将来がかかっている。2000haという広大な敷地には、油ヤシ、ゴム、ドリアンなどの林や学生用の回教寺院、幼稚園などもあり、スケールの大きさに圧倒されました。

### 8月26日

タイピンという町にある麻薬患者の収容施設に派遣された日本人青年海外協力隊員の活動を見学。収容者の99%は警察に逮捕され強制収容され、約1%が自発的に入所するとのことでした。1度入所すると最低でも16ヶ月は出所することはできず、収容者のTシャツは4ヶ月ごとに色が赤、黄、緑、白と変えられます。入所するとまず、薬物鑑定、精神鑑定などを受け、独房で2週間程度をかけ麻薬を断ち、その後内科的または精神科的治療などを受けながら、溶接、自動車整備、木工などの職業訓練を受け出所を待ちます。これだけの時間をかけて更生しても、3割程度の人がまた施設に戻ってくるということです。

### 8月27日

シンガポールに移動し日本からの帰国青年、JICA専門家、国際問題論文コンクール受賞者らとの懇親会。

### 8月28日

JICAシンガポール事務所を訪問しシンガポールの概略と当国における日本のODAの現状などの説明を受けた後、シンガポールサイエンスパークにある日本シンガポール人工知能センタープロジェクトを視察しました。ここでは従来のコンピューターより洞察力や思考能力を持たせた人工知能(AI)の開発とオペレーター養成の講習会などがおこなわれていました。

この研修に参加するまでは、日本の開発途上国に対する援助は資金を与えるだけでアフターケアが伴わないものばかりと批判的にみていましたが、人材養成を基本にしているという事実を確認でき、なんでも金で解決するという経済大国のいやらしいイメージを解消することができ、自国を見直すことができたのが何よりもの収穫でした。



氏 名 服 部 好 美  
所属学校 三重県立飯野高等学校  
担当教科 英 語



マレーシア人が日本人のように働けば、マレーシアはもっと発展するだろう。——いや日本人もマレーシアに来たらマレーシア人のようにになってしまう……コタキナバルでの技術者の方との雑談の中での話である。

熱帯モンスーン風土の東南アジアでは、一年を通して暑い日が続く。強い日差と激しい雨を避けるために家の軒先は張り出し、屋根は急傾斜になっている。コタキナバルで見られた水上家屋では、水浴をする人の姿があった。(河川が住民のトイレとして使われているそうだが、これは施肥の役割を果たしている?) 人人はゆったりと、自然に適應した生活を営んでいる。せわしい日本人の私たちには、つつい彼らが怠惰のように思えるのだが、その緩慢な生活は彼らにとってみれば「生活の知恵」あるいは「自然に対する従順な順応」といったところらしいのだ。

焼畑農業にしても、粗放で原始的な農業形態ではあるが、雨水にだけ頼ればよく、人口の希薄な時代であれば、一度火を入れても自然が回復する余裕もあり、ある意味では自然に適應した生活であったかもしれない。しかし、人口急増による農地や放牧地の拡大、木材需要の増大(特に先進国の)により、「緩慢な適應」は加速化された世界の動きの中ではかみあわないものとなってしまった。

「(日本は)年々増大する木材需要をまかなうことができず、〔略〕世界最大の木材輸入国となっている。また、近年は積極的に海外の森林資源の開発を進め、開発輸入を行っているが、乱伐による森林破壊が進み、深刻な問題を投げかけている。日本も、国際協力事業団などにより、造林の技術協力が、フィリピン、タイ、インドネシアなどで進められている。」(『詳説 新地理』二宮書店)とあるが、実際、JICAの森林保護プロジェクトは世界各地に及んでおり、今回視察したサバ州造林技術開発訓練計画も実施されているものの1つである。農業放棄地、伐採跡地などを対象にして、アカシアマンギューム等の早成樹種の造林を進め、技術者訓練を行っているが、区域の地形は起伏の激しい急傾斜地を含み、土壌も痩せている上に、苗木を生産するにも何回もポッティングを繰り返さねばな

らず、技術者の方々の地道な作業にはただただ頭の下がる思いがした。

マレーシアにおけるこうしたプロジェクト式技術協力は、バイオテクノロジー、ファインセラミックス、放射線の分野にもおよび、効果を上げている。また、栄養指導、家族計画指導、登校拒否児指導、麻薬中毒患者の更生施設での指導と、草の根レベルで、人と関わっている使命感あふれる協力隊員の姿も各地で見られた。

〔シンガポリアンは、バナナのような——外は黄色で、中は白（見かけは黄色人種でも、白人のマインドをもっている。）〕

シンガポールは、英語を公用語とする一方、外国からの資本を積極的に受け入れ、経済発展を図ってきた。その結果、物質的に豊かになるとともに、西洋的な価値観が浸透し、「バナナ」とあいなるわけである。

今や大部分の児童が二ヶ国語（英語プラス中国語、マレー語、タミール語）を話し、行政用語でもある英語は非常に重要である。しかし、その一方で、英語を話せない祖父母と英語を中心に生活する孫とがコミュニケーションできなかつたり、英語ももう一方の語も不完全なままになったりすることもあると、中国系の若い女性教師が語っていた。彼女自身、日常のコミュニケーションには英語を使用することの方が多いそうで、中国語が「母語」という感覚さえ持ち合わせていないように感じられた。

東南アジアは、民族的にも宗教的にも多様性に富んでおり、しばしば統一性と多様性が併存する地域であると言われる。シンガポール政府は、シンガポリアンのアイデンティティの危機を、民族的イデオロギーを人工的に作り出すことによって克服しようとしている。シンガポリアンらしさや、帰属意識を生み出すため、このひどく西洋的な国が儒教主義の東洋的な価値観を追い求めようとするれば、非中国系住民は黙っていないだろう。それでは、人種間の経済的不均衡是正を理由に、マハティール首相がマレー人優遇政策を推し進め、中国系住民から不満をかったマレーシアと同じである。

シンガポールは、天然資源をもたず、第1次産業に従事する者もほとんどなく、人材の育成には極めて熱心である。日・シAIセンターでは、人工知能分野の人材を養成し、先進国の仲間入りに向けて更なる産業構造の高度化を図ろうとしている様子が見えがえた。

本年1月、シンガポールで開催された第4回ASEAN首脳会議において、ASEAN自由貿易圏（AFTA）創設等を盛り込んだ宣言が採択された。より開かれた市場の創設のために、日本の果たす役割はますます大きくなるだろう。ASEAN諸国もインドシナ諸国も政治体制を越えた平和共存のための新たな激動の時代を迎えている。この地域へのJICAを通じた協力、援助を尚一層期待する。

貴重な海外研修の機会を与えてくださった国際協力事業団に心から感謝申し上げます。

氏 名 山 本 泰 彦  
所属学校 福井県立敦賀高等学校  
担当教科 英 語



今回の旅行を通じて一番心に残っているものは何であろうか。コタキナバルの水上生活者、ピサ島の紺碧の海、露店で売られていたマンゴスチン、ドリアンなどの熱帯の果物、夕日を浴びて黄金色に輝いていたモスクであろうか。私にとってはそのいずれもが忘れがたきものとなっている。いろんな文化、宗教が入り混じり、マレー系、中国系、インド系の人々がそれぞれの歴史を負って集まっているマレーシアにすっかり魅了されてしまった。

最初の2日間は移動に明け暮れた。シンガポールのチャンギ国際空港の超近代的ビルから、マレーシアのスバン国際空港、そしてサバ州コタキナバルへ向かう。途中パスポートのチェックがある。同じマレーシアの国なのに、まるで外国に行くみたいである。午後5時、無事シャングリラホテル到着。その夜しばしば停電となる。マレーシア滞在中にこの停電を数回経験した。現地の人によれば工事中とのこと。どうりでどのホテルの部屋にもロウソクが備え付けられているわけである。エレベーターや信号機までも止まり、町全体が数分間暗闇に包まれるのである。昔、台風で停電になり、眠れぬ夜を過ごしたことを思い出した。

3日目、ピサ島見学。コタキナバルの沖合に浮かぶリゾートアイランドである。水上家屋を横目に島まで小船で20分余り。周囲を珊瑚礁に囲まれたのどかな島で海水浴、スノーケル、バーベキューを楽しむ。日曜日ということもあり旅行中一番のんびりした一日となった。沖合で誰かが言った。「水族館みたい」。まったく同感である。

4日目、サバ州造林技術開発訓練所視察。コタキナバルの南25キロ、周囲を湿地に囲まれたゴム園の跡地に500ヘクタールにわたってアカシアマンギウムなどの熱帯林を植栽している。サバ州は日本の南洋材の重要な供給地で伐採により森林資源が減少している中、造林技術の開発改良、技術者の訓練養成を目的としたプロジェクトである。園内を車で案内してもらい、実際の木の成育状態を見せていただいた。植える間隔を変えてみたり、下枝を刈ったりして、成育の違いを研究する。熱帯なので成育が日本の数倍速く、また、山火事防止のため24時間体制

で森林管理をしているとのこと。人手や手間暇をかけても、実際それが経営上採算がとれるかどうかは別問題ということである。赤茶けた山肌にいろいろな種類の木が整然と植えられていたのが印象に残っている。途中、食虫植物を発見しカメラに納める。

昼食後、アラビアンナイトそのままの州立モスクに立ち寄る。中に入るには女性は肌を見せない衣装に着替えなくてはならない。入り口に水をたたえた池があり、そこで顔や体を清めるようになっている。中はがらんとしていて大理石の床以外は何もなく、一階は男性、二階は女性に別れてお祈りができる。いかにも回教と言った祈りの静寂さをたたえて、ひっそりと立っていた。

5日目、クアラルンプールにもどり、マレーシア農科大学を見学する。1986年に設立されたバイオテクノロジー学科拡充計画の説明を受ける。2000ヘクタールもの広大な敷地にナツメヤシをはじめいろいろな熱帯植物が植えられていた。芝生や森林におおわれた広大な公園にきたような気分になる。キャンパスには頭巾をした上にヘルメットをしてオートバイに乗っている女子学生の姿が見受けられた。

6日目、高速道路に乗り片道3時間、マラッカへと向かう。途中、麻薬リハビリセンターに立ち寄る。今回の旅行で一番感銘を受けた場所である。周囲を軍の兵士と鉄条網に囲まれ、500人もの麻薬中毒患者たちがここで、社会復帰ができるように、数々の医療ケア、心理学的療法、職業訓練を受けている。彼らは、服役期間が短くなるに応じて、赤、黄、青、白へとTシャツの色が変わっていく。思ったよりも暗い雰囲気はなく、ごく普通の若者である。自動車整備、封筒貼りをしているところであった。マレーシアの近くには、ゴールドトライアングルと呼ばれる麻薬密造地域があるため、いかに法で禁じても麻薬常習者が後を絶たない。彼らのうち半数は自らセンターに出頭してきて、ここでリハビリを受けるが、一割の者は、再度舞い戻ってくるそうである。彼らのうちAIDSに冒されている者もあり、自暴自棄になる彼らを宗教的アプローチによって救っている。女性専用のリハビリセンターも他に数箇所あるとのこと。マレーシアの悲しい現実がそこにはあった。カメラを向ける気にはとてもならなかった。

マラッカはポルトガルの雰囲気を色濃く残した港町。セントポールの丘を登り、マラッカ海峡を一望する。思わず息をのむ。コバルトブルーの海が眠るようにゆったりと流れ、水平線上には石油タンカーが見える。ふもとには狭い通りの両側

にくすんだ色の昔の町並みが続き、そこを歩いていると、町全体が静まりかえって、タイムトリップしている気持ちになってくる。季節風を利用して、東西の貿易船の中継地として栄えた面影も今にはない。時の流れの速さを実感した。

マレーシアには四季はない。よって、我々が持っている季節の感覚はなく、一年を通して温度差はなく蒸し暑い。冷房が備わっているところは少なく、バスも窓を開けて埃を舞い上げ走っている。日本人の目からみれば、彼らは勤勉には映らない。しかし、すべてが自然の営みと一緒にゆったりと過ぎていく生活ぶりを見ていると、むしろ我々の方が病的に働きすぎではないかと考えさせられた。マレーシアから学ばねばならないことはたくさんあるような気になった。また、今回の研修旅行を通じて、いろいろな先生方と出会い、会談することにより、皆さんの各高校での日頃の奮闘ぶりがわかり、明日からの自分のエネルギーとすることができました。また、いつか皆さんと出会い、マレーシアを訪れる日がやって来ることを切に希望して研修報告とさせていただきます。Saya senang sekali. Terima kashi. とても楽しかったです。ありがとうございました。

氏 名 武 田 俊太郎  
所属学校 埼玉県所沢商業高等学校  
担当教科 商 業



## 1. 視察に際して特に主眼をおいた点

- (1) 日本政府がマレーシア・シンガポールに対して J I C A を通して実施している返済義務のない資金協力とプロジェクト式の技術協力の内容について理解を深める。
- (2) 青年海外協力隊の活動の状況について認識を深める。
- (3) マレーシア・シンガポールの人々の生活の状況について理解を深める。

## 2. 国際協力の現場を見て思ったこと

### (1) サバ州造林技術開発プロジェクト

最初の訪問地として見学した東マレーシア（ボルネオ島）の北にコタキナバルという町があり、そこでプロジェクトは展開されていた。日本側から4名が派遣され、その下に現地からは約50名がプロジェクトに参加していた。このプロジェクトは1987年に開始され、何回かの契約更新を経て現在の予定では平成5年12月を期限に最終的なフォローアップとしての仕事に力をそいでいる。

さて、そのようなプロジェクトの現場を見学したのだが、ボルネオの荒地を切り開き、山林に道を作り、水道が機能しないため、山の上まで水をくみ上げるといふ仕事、そして暑さとの戦い。いろいろな面に活躍するはずの日本からの最新機器は、故障した時点で修理不能ということで倉庫に入れたままという説明に、ここが日本とは違う場所だということを強く実感させられた。特に、焼畑農業等との関係で、山火事から守るため高台に見張り小屋を立て24時間敷地を監視しているという話には心打たれた。日本にはない気候との目に見えない戦いのさまを知ることができた。それだけに、日本側のスタッフが引き上げたとしても十分サバ州政府にまかせられるようになったという話には感激したしだいである。

### (2) マレーシア農科大学バイオテクノロジー学科

首都クアラルンプール郊外の約2000ヘクタールという広大な敷地に農科大学はあった。バイオテクノロジー学科は日本から機材の援助と要員の派遣をもとに設置された。日本からの援助は年間6000万円だが、マレーシアの経済を考えた場合、それは多額な金額である。さて訪問では、まず大学側の説明を聞き、研究所の中を見学した。1986年1月から始められた学科拡充プロジェクトも7年目をむかえ、基礎的な研究の段階を終了し、現在はマレーシアの動植物に関する研究を行っているとのことだった。研究所の訪問後、大学の実験農園を見せていただいたが、縦4 km、横5 kmに相当するような面積であるため、バスで移動した。大学内は学生はバイクで移動するのが一般的なようで、大学内というより農村のモデルを見ているような錯覚に襲われた。大学の施設は充実しており、大学への政府の力の入れようと共にマレーシアでの農業の重要性を認識させられつつ訪問を終えた。

### (3) 青年海外協力隊、滝沢隊員活動現場視察<タンピン>

クアラルンプールよりバスで南下すること約2時間、マラッカ市の近くにタンピンの町がある。タンピンには軍事基地があり、その中に滝沢隊員の働く麻薬患者の強制更生施設があった。この更生施設は厳重に監視されており、2度の検門を通過しての到着であった。

施設は簡素なもので、食事等で使うのだろうと思われる集会所と作業場、そして各個人が寝る建物で、すべて平屋建てである。作業場は2ヵ所あって、自動車の修理場と封筒を作る作業場である。滝沢隊員は自動車工場のマスター（先生）であった。作業員が自動車の方に約10名、封筒の方に約15名いてそれがすべて麻薬患者なのだが、黄色、緑、赤のTシャツを着せられていて、この施設での残留期間が色で分かるようになっていた。目付きの異様さと号令による軍隊式のあいさつが印象的であった。

作業場を見学したあと所長（少佐）の話聞いた。患者はすべて男性（13～40歳）で犯罪で逮捕された中毒者が多く、この施設で回復しても30%程度がまた、ここに戻ってくるという話であった。中にはエイズ患者もいて、患者の検査の過程でエイズだとわかった時点で警察に引き渡したいのだが、引き取ってくれないので、しかたなく置いているのだということだった。所長はしかたなくということを強調し、話では更生施設の片すみに別棟を作って隔離してあるが、家族の訪問も全くなく、近々死に近い者も出ているという話だ



った。さらに麻薬の誘惑に負けてしまう理由はたった一つで、イスラム教（国教）を信じていないからだというくり返しの説明がなされた。患者たちの目付、強制施設的环境、そして所長の話に、私はショックを受けてしまった。そしてこれがマレーシアという国の現実的な一つの側面なのだと認識せざるを得なかった。日本での私のまわりの環境とのあまりの違いに、信じられない場所へ来て、信じられないものを見、信じられない話を聞いてしまったという感じであった。帰国した今でも、一番強烈に印象に残っているのがこの施設で、異様な麻薬患者の中で働く日本青年がいることに私は強い感動を覚えた。

#### (4) AIセンタープロジェクト視察

まず、シンガポールについての感想だが、東マレーシア（ボルネオ）、西マレーシアの順序で訪問した我々にとっては、最後の訪問地であるシンガポールは、マレーシアと何という違いだろうというのが素直な感想であった。ビルディングが林立し、地下鉄が走り、水道水が飲め、我々日本人と容姿のあまり変わらない中国人の多く住む都市、それがシンガポールであった。人口と面積からいうと日本の広島市と同じくらいである。シンガポールは日本の資金的技術的協力国の優等生で、AIセンター以外も含めて日本の協力は最終段階にさしかかっているというシンガポールJICA事務所の説明があった。その中でAIセンターは建物はシンガポールが負担し、指導要員と機材のある程度は日本が援助という形で運営されている。ソフト開発の現場を見させていただいたが、いずれにせよ研究結果が出てくるのは数年後で、今後が楽しみというプロジェクトだった。

### 3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力

とかく日本は、世界の国々から資金の協力のみ行くと誤った目で見られがちである。私は青年海外協力隊の活躍をもっとPRすべきだと思う。日本国内においても彼らの仕事はもっと高く評価されている。

#### 4. 所感および意見

##### (1) 研修時期および期間

時期は、参加する県の全員の先生が夏休み内に終わられるよう研修の最終日を8月24日ぐらいにしてほしい。期間については、15日間ぐらいにしてほしい。

##### (2) 研修日程および訪問先

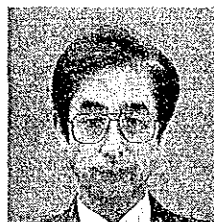
1990年の埼玉県の海外研修（マレーシア）の日程を見たが、見学場所が多く、移動が大変だろうな、という感想を持った。今年度はそれに比べて非常によく考えられた日程だったと思う。ただ一つの改善を望むとすれば、8月26日マラッカ市内の視察をしているのだから、そのまま南下し、シンガポールに入れば時間的な余裕ができたと思う。ただ全体的には身体に無理のない良い日程だった。訪問先については、どんな組合せでもいいから3ヵ国を希望したい（特に東南アジア）。そうすればいろいろな比較ができるし、日数が長くなれば他県の先生方との交流もより深まり、情報交換できる。

##### (3) その他全般的な所感

マレーシアとシンガポールで各1校くらい訪問させてもらい、現地の高校生と話をしたかった。高校が不可能なら中学校でも小学校でも良い。とにかく現地の若者の意識を知っておきたかった。

最後に、私は今回の研修に参加できたことは、私の人生で最も意義のある体験だったと思っている。JICA並びに国際教育研究協議会の関係者に深く感謝すると共に、授業や部活を通して生徒に国際理解の大切さを語っていきたいと思っている。

氏 名 山 田 宏 治  
所属学校 私立横浜商科大学高等学校  
担当教科 英 語



### 1. 特に主眼をおいた点

- ・日本とは異なった文化を持つ外国という点で、そこに住む人々の生活習慣や民族的な諸問題の一端でも知る。
- ・現地で実際援助活動に当たっている青年海外協力隊員達の生の声を聞くこと。

### 2. 国際協力の現場で

#### (1) 参考になったこと

- ・実際に国際協力の最前線に立ち、そこで活躍している人々に接し、その活躍ぶりや苦労話など自分の目で見、耳で聞くことができたことは学校の授業で大いに生かされる知識となった。
- ・我々日常生活の中で働いている仕事の些細な面でさえ場所を変えれば国際貢献になれるということ。

#### (2) 気になったこと

- ・現地の人々の生活水準が予想していた以上に高そうで、外国の指導援助がそれほど必要なのだろうかと思われるところもあった。
- ・隊員たちの滞在期間と少ない報酬と病気、怪我、事故等の補償。

### 3. 我が国の協力ぶりを各方面で紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

- ・我が国が何の援助もしていない等と自分の無知を棚に上げ非難するような某国の大統領もいるけれど、こう言った背景には日本側の広報活動も少ないと思わざるを得ない。
- ・国内における広報活動も独自のテレビ番組（毎週1回30分程度）などの制作放映を通し、JICAの援助実態、青年協力隊員等の活躍の現場などをどんどん知らせ一般大衆への啓蒙活動も必要なのではないでしょうか。

#### 4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

- ・授業及びクラブ活動（インターアクト・ボランティア）の生徒に対して、訪問した国の地理的、歴史的背景と共に国際貢献等についても話して行きたい。

#### 5. 所感および意見

##### (1) 研修時期及び期間

- ・適当と思われる。

##### (2) 研修日程及び訪問先

- ・現地の学校や典型的なマレーシアの家屋（マラッカ周辺にたくさん見られた）をそれぞれ1か所位見学できたら良かった。
- ・協力隊員が活躍している地方の小規模施設なども見学してみたかった。
- ・シンガポールとの比較を考えるとブルネイも訪問してみたかった。

##### (3) その他全般的な所感

今回高校教師海外研修派遣に参加させて頂きマレーシア、シンガポールの両国を視察することができた。出発前には一応予備知識として旅行ガイドブック程度の簡単な地理、歴史、文化などの知識を持ってでかけたものの、想像していた以上の両国の国状の違い、また、民族の多様性を自分の目で見、肌で感ずることのできた貴重な旅でもあった。そして何よりも現地で実際に指導援助活動をされているJICA職員、青年海外協力隊員の仕事の現場を見学でき、彼らと懇談でき、説得力のある生々しい知識と感想は学校での授業に生かすことのできる大きな知識となった。特にマレーシアで懇談した若い青年隊員たちの現地でのなまの生活体験談が聞けたことは大きかった。そして自分たちに課せられた任務に対するあのひたむきな姿勢と彼らの輝いていた瞳を忘れることはできない。そして彼らをこの仕事に志望させた動機を聞かずにいられなかった。我々が会った数名の隊員たちの動機ですべてを語ることは出来ないであろうが、そこには「自分にできることを何か他の人々のために役立ててみたい」という共通のボランティア精神が感じられて嬉しかった。（同時にシンガポールを訪問した時いたるところで見かけ、DFSの高級な貴金属やカバンなどに群がっていた豊かな国の観光客である日本の同世代の多くの若者たちを見た時、何か複雑な思いにかられてしまった……）

わが国は国土の7割ほどが緑に覆われているが、国内で使用している木

材の大半を外国から輸入している現状であるが、地球の温暖化現象に深く関わっているラワンなどの熱帯林はマレーシアなど東南アジアから40パーセントと大量に輸入されていると言う。その輸出国に対して森林を元に戻してやることができればそれにこしたことはない。また、それが当然の義務・援助と言えればそれまでであるが、一口に森林の生態系を元に戻すなどということは並大抵のことではない。そこでJICAの行っている造林技術援助がいかになされているかをこの目で見てみたいというのも今回の視察の大きな関心事の一つであった。ボルネオ島サバ州キナルウト(Kinarut)での造林技術開発訓練プロジェクトを見学させて頂いたが、それに携わっていた指導員や現地スタッフの地道な努力には頭の下がる思いであった。我々素人は苗木を植えて行けば良いように簡単に考えていたけれど、その苗木が簡単に根がつかないから苦勞されているとのことであった。土壌に合う木を何種類も選び、その木を鉢に植え、成長する過程を絶えず観察し、ある程度の大きさになったら植える間隔などを変えて実際の山に植林し、その木がどのように成長して行くかをチェックしてゆくなど、何とも気の遠くなるような仕事であった。樹木に関する知識はほとんど持ち合わせていなかったけれど、彼らが取り組んでいたアカシアマンギュームという初めて耳にした木の名前を忘れることはないだろうし、また、食堂で今まで何気なく使っていた割りばしを手にする時には彼らの取り組んでいた仕事ぶりを思い出すに違いない。

今回、高校教師海外研修旅行に参加させて頂いたことは新たな知識の獲得にとどまらず、全国各地で国際理解に取り組んでおられる多くの学校の先生方とも楽しく情報交換ができ、非常に有意義な旅行であった。この旅行を企画され、援助して下さった国際協力事業団をはじめ、推薦を頂いた神奈川県高等学校国際研究協議会、快く参加を認めて下さった学校長に対し感謝申し上げますと同時に、この研修がこれからも永く続けられ、一人でも多くの学校現場の先生方が参加出来るようお願い申し上げます次第です。

氏 名 渡 辺 紀 之  
所属学校 静岡県立吉原高等学校  
担当教科 社会（地理）



## 1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

今回の海外研修に際し特に主眼をおいた点は、日本国内においては様々な批判報道もあるODAではあるが、その現場の状況はどのようなものであるのかという点。また、現在展開されているODAが最終的にどのような形でその国に定着することを目指すのかという点。さらに、社会科地理の教師として、発展しつつあるマレーシア、シンガポールの国民生活、複合民族国家としての暮らし、熱帯林の伐採で何かと有名なサバ州の現状を机上の知識としてではなく自分の目で確認するという点である。

## 2. 国際協力の現場で、参考になったこと、気になったこと

### ① サバ州造林技術開発訓練プロジェクト

まず何よりも情熱的に活動する日本人専門家の姿が印象的であった。現場で働く彼らは目的達成のため献身的に活動しており、国内で言われているようなODAに関する問題を彼らにぶつけることは見当違いであると思われた。

熱帯林の再生には様々な問題があることは知識としては知っていたが、数日晴天が続くとたちまち砂漠のように乾燥し樹木の生命を奪う熱帯のやせた赤土、植物の成長も早く代謝も盛んなため地上には枯れ葉も多く大火災の危険性が高いこと、草原化した熱帯林伐採跡地が乾季には森林火災の導火線となることなど、実際に自分の目で確認することができた。

このような状況下で、しかも熱帯林の保護が叫ばれている現在、サバ州の森林資源の維持増強に寄与することは、実に大変ではあるが重要な仕事であることを実感した。

私は、そこでの中心樹種「アカシア・マンギウム」が将来的にマレーシアサバ州の経済を支える柱のひとつでもある森林資源の代替になるのかという質問をした。この質問自体は、このプロジェクト本来の目的から逸脱しているかもしれないが、将来のこの地域の経済や産業を考える上でこのことは重

要だと考えたからである。スタッフは、パルプ材としてはすでに採算がとれるが将来的には未知数であり、今後、病虫害を克服し商業ベースに乗るような木に作り替えて行くことも夢ではないという希望を語っていたが、この地域における将来的な課題は、このプロジェクトの経験をどのように実際の場に応用し熱帯林の復元や有用樹の育成をはかっていくかということだと思う。活動の相手が森林という長い目で見えていかなければならないものだけに、今後も長期に協力し、熱帯林の伐採ばかりが有名な日本の別の面を受け持って欲しいと思う。

## ② マレーシア農科大学バイオテクノロジー学科拡充プロジェクト

生物を使って人間生活を豊かにするという目的で、専門家派遣、機材供与研修員受け入れを組み合わせたプロジェクトとして実施されている。このプロジェクトに対してマレーシア側は研究棟を建設するなどの協力をしている。ここでは、マレーシアの熱帯という風土を生かした特色あるバイオテクノロジーの研究を進めており、やがては、この施設を中心に「マレーシアのためのバイオテクノロジー」という本当に実りあるプロジェクトとして発展しひとり立ちしてほしいものである。

しかしながら、このプロジェクトの最大障壁は「バイオテクノロジーに対するイスラム教の考え方」ということを聞くと、ODAの現場には日本で考える以上の困難があるということを実感した。

## ③ 日・シAI（人工知能）センタープロジェクト

シンガポールは現在一人当たりGNPが1万3000ドルに達し、発展途上国から卒業しつつあり、どのようにODAから卒業させるかが課題だという。またシンガポールはNIES, Four Dragonsの一角として高度付加価値産業や情報産業の集積を積極的に進めている。このような状況下、このAIセンタープロジェクトは現在のシンガポールが最も必要としている分野での援助である。プロジェクトの柱のひとつは人材の育成でありODAの内容が被援助国の現状によく合致している例だと思う。

このプロジェクトに限らず、マレーシアのプロジェクトにおいても、人材の育成ということが私の予想以上に援助の中心になっていたことが印象的である。物だけでつながる関係はもろく弱いものだが、人材育成の過程で形成される人間関係は将来的に続くものであり、最も本質的援助でもあり、また、

日本という国を印象づけることにもなると思われる。

#### ④ 協力隊員の活動現場視察、協力隊員との懇談

今回、プロジェクト視察以外では青年海外協力隊員との懇談のなかで様々な話を聞くことができた。コタキナバルで出会った人達は2年間という期間のなかで、外国人など一人もいることのない地方の町村に定着し現地の人々と同じ生活者として地域に溶け込んだ援助生活を送っていた。彼らは、援助する立場ではあるが現地の人々と共に生活するなかで逆に教えられることも多いと話していた。街中で現地の人々と気軽に声をかけあう彼らのような草の根的な協力隊員の生き方自体が素晴らしいと感じられた。

マレーシアの麻薬患者更生施設で活動する協力隊員の現場でも同様の感想を持った。彼らの活動は個人的なアイデアや努力の下に最も根源的な人と人との触れ合いという部分を受け持っているのだ。ここまで来ると国際協力援助も最終的には人間個人に負うところが多いことを実感するとともに、このような場で生き生きと活動できる人材を育成することが私達教師の重要な責務であるとも感じた。

### 3. 我が国の協力ぶりを各方面で紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

地道に活動する協力隊員の存在や今回視察したプロジェクトなどは、もっと日本国内において一般的なメディアを通じて紹介されてよいと思う。ODAという批判的な報道ばかりがセンセーショナルに取り上げられることが多いわけであるが、今回視察したプロジェクトや協力隊員の人的貢献活動など、現場における活動状況を日本国内の人が正しく認識すること（過大評価はよくないが過小評価もいけない）は、日本国内において国際協力への関心と人材に対するバックアップを高める機会を提供することになり、協力隊員への理解や帰国後の生活を考える環境を整えることにもなるはずである。ODAに関する問題は問題として正面から取り組むきっかけにもなると思う。

### 4. 今後の教育活動に生かす具体的方策、あるいは教材として考えていること

今回の体験をもとに国際協力、ODA、協力隊員の生き方等、生徒に考える材料を提供したいと考えている。

マレーシア、シンガポールは共に複合民族国家であり、生まれながらにして



国際人としての生活を余儀なくされる。異質の文化と共存生活が誕生とともに始まるわけである。現地の人から「日本人は勉強しているのになぜ英語が話せない人の方が多いのか」と言われたとき、「環境が違うから、英語を使う必要がないから」としか答えられなかった。今後の日本が民族のるつぼになるとは考えられず、自然に国際人としての感覚が身につくことは難しいと思うが、彼らが異質な文化との共存生活の中で自然に身につけた、異質なものの存在を許容する姿勢というのは、「国際化」が課題となっている日本人にとって参考になると思う。

## 5. 所感および意見

今回の研修の感想を一言で言えば、まさに「百聞は一見に如かず」であった。ODA関係は勿論、クアラルンプールからマラッカへ移動する高速道路の途中に見えた、視界の限り延々と広がるゴムと油やしの大農園、不法入国者の粗末な水上家屋の列、マレー人優先社会にあってあちらこちらで感じられた中国系のパワー、高層ビルが林立し想像以上に美しく作られた都市国家シンガポール、新たに発見することも多くまた知識を自分の目で確認できたという点においても有意義な研修旅行であった。

研修期間、日程については特に問題なく、有意義に楽しく旅行させてもらった。欲を言えば、教師として訪問国の学校を視察したかったということと、協力される側の人々の気持ちや意見を聞けたらよかったと思う。

今回、このような機会を与えてくれた国内外のJICA関係の方々から心から感謝するとともに、私にとっては今回の研修を出発点として、できることから実践していきたいと考えている。